言海原稿

第七号

洋学文庫
文庫8
A 149
13

言海原稿

第七号

元　ラ　ハヨリ終マテ

大槻文庫

大正九年九月十七日綴

特
118
199
1131

ウ一ウ 有髪僧 僧ニテノ剃髪セヌ者、修験者ナドニアリキ又在
俗ニシテ仏道ヲ信ズル者ヲモ云フ〈可シ〉 国語教学第十
うはせい 上番 船長ト云フニ同ジ
うはづみ 上積 船車ノ積荷ノ上ノ方ニ積マレタル物、上荷
ウハツキウ 烏八臼 曹洞禅寺ノ石塔ニ刻スル文字、隨求呪
（大隨求陀羅尼経、十二）ノ中ニ怒琴鶏ト云フアリ其末ノ一字ヲ
誤リテ三分シ烏八臼ト書クナリト云フ此一字ノ字ニ吹カルト云フ曹洞
引導集ニ見エタリ（拾屋筆記、六）
貧物集ニハ、大地獄ニ落チテ苦患ヲ受クルニ隨求陀羅尼ノ文字一ツ
口ニ吹カレテ来タリカノ墓所ニ出リタル其功力ニ因リテ地獄ノ界後ニ

破レテ忽チ淳ニキ世トナリ」沙石集ハ此一字最ニ吹カル如業ノ等流変化ノ分身ノ字、どめ佛ノ化身ナリトアリ

うはて・ゑげ　「上手投」相撲ノ手ノ名、さたてゑげ（ノ條ヲ見ヨ）

うは・づる　自四「上鈞」（一）ツリアガル。度ヲハヅレテ高クナル（聲又ハ楽器ノ音ナドニ）（三）ウハツク。ウハウハス。ウハスベリス（人ノ性質ニ）軽浮

うは・ぞう　「後妻」（上ハ妻ノ約轉）（ただ、ごぞう、あさぞう）衣ニ壁ヘテ上ニ重ネ着ル意トスル後妻ニ対シ（ノ條ヲ見ヨ）

（一）第二ノ妻　（妻ノ如キモノ）

（二）後妻　嫡妻ノ條ヲ見ヨ

（三）後ニ今ニ又後剛。後妻ト対アリ

（三）うはぞうめたみノ略

うはざし・ぶくろ　「上刺袋」上ハ（ウハザシ）ニ出ル布帛ニテ作ル袋ノ方図ノ底ヲナシ上ノ口紐ヲ結ブ（普ニ他行ノ時衣服ナド入レテ従者ニ持セタリ）（ふくろがき）

つかりヲ作リ　略シテウハザシ。

女房方故実（　）「うはざしぶくろノ条、男ノうはざし・つかり義三十三アルベシ」

うーばい　「烏梅」（古ヘハ烏梅ト訓ミキ（梅ノ條ヲ見ヨ）烏ハ黒キ義煙ヘテ黒シ）又烏梅、梅ノ実ヲ燻ベテ乾シタルモノ、香気アリ

薬用又漆料トス　倭名抄十二ニ菓名類「烏梅丸治二丁腫下痢」醫心方五十四「烏梅」康頼本草、上六十梅実年久青黒之大乾烏梅者見諸菓部」和漢三才図会ニハ「烏梅布波倍安」

うはしき「上敷」(二)床置ノ上ニ敷ク。名義抄「褥ウハシキ、シトネ」

ニク」(三)鞍ノ敷ニ同ジ

(今昔、十七「うはしき」ノ上ニ散ラシオキケルニ」)

うーばくか「右幕下」(幕下ノ條ヲ見ヨ)「右近衛大将ノ居所

(三)其大将ノ敬稱 **枕朝ノ例**

うはーざし ① 「上差」② 軍将ノ壺胡籙ニ征矢十九本 (内三本ハ刺スコトヲ中差トイフ) 別ニ一本ノ

鏑矢又ハ鏑ノ表 ③ 征服ノ矢ヲ刺ス所ヲ是レ上差ノ矢ナリ神社ニ祈請アル時ニ上差ヲ

奉ルト云フハ此大征服ノ上差ノ矢ト紙ヲ巻キ込ム」(松屋筆記)

盛衰記(三十六、第十一條「南市武者所清家云、竹服ノ上差抜キ出シテ」 表矢

太平記、第十條「上差ノ鏑ノ篠村八幡宮ヲ見タリ」(三編一竹助 歌舞伎座ニ納メラレケレバ者」

今昔、廿七「胡籙ノ上差ノ第一竹助」 舞子、七、木曽殿義仲敬白ト書テ我カ身ヲ射ケル十三歳ノ上矢ノ鏑ヲ

抜キ取テ取副ヘテ大内ニ奉ラレケリ」

うはーや「上矢」 うはざし(上差)ノ條ヲ

相従ノ人々 我モ我モト上矢一ツ、南奉リケル

うばざし 「上刺」（絲ヲ表ニアラズシテ刺繍アラズんべし）

（二）布帛ノ地ニ稍太キ絲ヲ以テ表裏ニカケテ碁盤ノ目ノ如ク縱横ニ掬縫ニ刺シ微チルセハ絲面ニアラハレテ後ニ五ツ刺子ヨリ平包（原書）

布袋 ヌノフクロ

「袋ニ入レタルモノ」ト破レザルガ居ヤリ

雅真裝束抄ノ「平包ノうばざし」書札雜々聞書「うばざし代衣

ヘ圓座ヲ入レ候テ御持參寺」

（三）特衣直垂ノ袖括、襟括、裾括ニ組緒丸緒ヲ以テ一筋（絲）上表●ニ名

モノ（三）うばざしぶくろノ略。

うば 「姥」（姫ノ轉、おばぎ、うばぎ（蕣蕙）うざく、おざく（蕣））

（二）姫。老イタル女。老女（姫）老婆。好忠集「年經レバうばノ玉裳モ

老イニケリカラスノ髪ニ雪積リツツ」

（三）特ニテ乳母、ソノト、チッケ、マ、オンバ。乳母

夫木抄三十五、雜「イヂ宋ん、うば女姥ノカサネツ児手柏ニ面ナラズ

ム」著聞集五「宋山ノイチゴサカレクナリニケリ」うばラガイセニウレシカルラム」

（三）とら、ふのうばノ見ヨ

ウバイ 「優婆夷」うばそく（俗ヨ

うはーおき　上置（二）物ノ上ニ置キ添フルモノ

（三）雑煮　餅（シッポク）　蕎麦ナド汁物ノ上ニ載タルモノ、里芋、青菜、椎茸

焼豆腐、蒲鉾ナド味付ケテ煮テ用ヰル。

うはーがみ　上紙（ウハガミ）（二）上包（ウハヅツミ）ノ紙（三）表紙（ヒヤウシ）。

うはーかーもち　姥餅（ウバ）　寛永頃佐木義貞ノ母様後醍醐ノ幼児アリ其乳母養育資ニテ往還ノ大名其家ニ由緒ヲ述ベテ餅ヲ賣ル（ウリ）ニ起ルト云（東海道名所図会）

うはーがり　上借（ウハガリ）　金銀ヲ借リ先上ニ又借ルコト

うはーがれ　上枯草（ウハガレ）　木ノ上ノ方ノ枯レタル。ウラガレ。夫木抄ニ「うはがれの草葉ノ霜ニナホサエラル春メキヤラム下駄ノ古道」

うはーまへ　前（ウハマヘ）　上米（ウハマイ）ノ訛　物ノ改事部

年貢ノ米ノ中ヨリ幾分ヲ調進セシムルヲ上米（ウハマイ）ト云（初穂ノ意ト云）ト云ヒキトリテ其上口ヲ取ル故ニ上米（ウハマイ）ト云

口銭（クチセン）ト云フ　受ケ渡ヒテ仕掛ノ代料賃銭ナドノ内ノ幾分。口銭（クチセン）

コレヲ收ムルヲ上前ヲ取ルト云フ

うはーまちー　上廻（ウハマハリ）　何ノ金ナドノ上流ノ役員、下流ノ者ヲ下廻（シタマハリ）ト云フ

うはーまへ　上前（ウハマヘ）　衣ノ左右ノ衽（オクミ）ノ前

ニテ初遣（チガ）ヒタルニ上ニ重ル　裾（スソ）

下前（シタマヘ）ト云フ。シタンマヘ。

左ノ方。下ニナル右ノ方ヲ、シタカヒ、ミタカヘ。

うは、さく 「上役」役人、上位ニ居ル者、下位ニ居ル下役トモ

うばら 「荊棘」（文ばらトモ云フ）群刺ノ特カラ、だく、むだく（拾）むじな、うじな（格）

わたりせ、わたらせ（渡瀬）（二）刺アル小木（経作）天治字鏡 十二「棘、宇波良」

（三）倭名抄五ハ「常陸国茨城郡、宇波良岐」

（三）野薔薇（イバラ）ウマラ（ムバラ）ムバラ。「本名和名、上ニ「墻薇、

宇波良」倭名抄二十六「蕾薇、無波良」万二十三「路ノ辺ノ宇万良

ノ植ニ這ヒ」

支那語ナド

うはなり、ねたみ 「後妻、嫉妬」（二）嫉妬ハ後妻ヲ嫉ム、

古事記、下（仁徳）三「大后、石之日売命甚多嫉妬、故天皇所御之妾

者不得臨宮中」（三）ネタム、嫉妬ハ二字、略シテ「妬」ト云フ。

津「逃」ヲ尼寺ニ舎ム、即新二尼ヲ、於是一尼嫉妬ノ歌」名義

抄「妬、ウハナリ」

うはなり打ちの。盛衰記。

(二)

「後妻打」嫡妻が嫉妬して後妻のもとへ行く。女嫉妬とも

他女打ち。

村上帝の御宇左中将兼家、北方三人アリ

「或時此三人ノ北方一所ニ寄合ヒテ妬ム色顕ハレテ髪カナグリ衣引破リナンドシテ見苦しかりけり」『宇治物語』二、村上帝、宣耀殿女御ニ九條右大臣師輔女御ヲ土器ノ礎ニテ打ケルトヅ聞エシ云、アヤシノ下ラヲトメノ後妻打トヤランニテ髪ヲナグリ取組ンニ引倒シタルハ理ニソ侍ルヤ」ロ記「康治二年(1143)青女ノ宣旨ニ従ヒ宣旨ニ云ク上臈打」林逸篇同(明題)「嫉妬」

(三)宣旨時代ノ未ダリ夫ノ妻ヲ離別シテ後妻ヲ取ル時其取リカタニ困リテ前妻其親ニ女トモヲ使ヒ使ヒ告ゲオキテ新妻ノ家ニ就テ女家付ナド打チ暴ラカシテ相当打又騒直打トモヒキトルフ(昔々物語)追加篇

一千句「うはなりの姿ノホロヒヤ」アラヌナゲキヲ去ラ小木ザキ」

(三)女ノ怨霊、謡曲三山「妬サモ妬シうはなりの打チチラシ打チチラシ」トアルハ女ノ死霊ナルヨリ松屋筆記八ハ「こはなり盤若、宇治陪

ラ三人ノ怨霊ヲはなりトハ中古ヨリ云フ詞也」

うばたまの「上総」水の面に立つ波。

大木抄十七、水「山川のうはたまの氷冬の曙」萬代集、の雜「高岩。

うはたまの 荒れ、潮干」

うば、なげし 上長押 今ニテハけがえ。すなげし、俗ヲ

うばゝの、たまゝ(名)

(君のかゞへ——モトヨリヲ玉章トシ)

(七音句ニ造語ヒ)

(黒髪ト云フニ)

(生月)

(ヒさゝゝ)

(ヒさゝゝ)

曾丹集「年経ばうばの[illegible]も老ぬ。鳥ハ髪ニ雪積リツヽ」

うへさま（様）上様（上方ノ義）（二）上ノ方 宇治拾遺 十二

「三度ノ上さま（源氏ノ殿ヲ）」

上ニ上ヲ申シ奉ル代ニ

（三）貴キアタリ。太平記、七、船上還幸「上様ニ

イマダ知ッテレメサレ候バズヤ（三）幕府ノ方、公辺。南秋物語、三、

「うへ様ノ御耳ニ入リナバ召取ラレ禁獄死罪ニ行ハレナム」

うへさま（代）上様（前候ノ義ニ同ジ）（一）主上ヲ申シ奉ル時 上

太平記、十六、金崎落城、上様ノ御事、タトヒ敵ノ中ヘ出デ候フトモ矢

ヒマセウ、マデノ事ナレ候ハズ

（三）借レテ将軍ニ用ヰル足利将軍

太平記 高氏ノ上様ニ

うべーレ（副）宜（シ）強ク指ス辞 宜

草紙下（ノ）「高麗ル日ノ内子宇佐ニコソ渡ヒタマヘ」「宇佐ヒカ

上様ノ御事ハ太平記ニ使ヒ

「万二十ノ「宇佐之神代ニ始メテ」

えのおんぞ 表衣（ウワギキ） 表衣（ウワギキ） 別項 漢文の「無紋」うへの浄衣（ミヅ）を鈍

色ノ帝下（シタカミ）ノ礼衣」

えのおんぞ 「上男」ウヘビト、高上人

「古今の秋上」「秋立つ日えのおんぞの袂にも鴨の河原の川風ぞ通ふらんケル」

えびすえ（ヱ） 向 諸人（ヨロヅノヒト）

然アルベキコトヨ、ソノハズヨ、モツトモナルコトヨ」万十三（サイ） 諸（ショ）諸名 世ノ知ラズ

「仁徳紀五十三年「我が大君の手纏ぬ我が聞かず」

うへつぐみ 「上文」 神代文字ト称セル字ノ形 粗筆 猫ノ如シ 日文あ

あいちの数り

うべつみち「東海道」（海辺之道）（海辺之道）ノ約ノ人ノ古ビ「海道」トアルハ、

「東海道」。西宮記「ウミベツミチ、ウベツミチ」北山

抄「山中信濃美知」　（天武紀上。「東海軍」）

うへつかた「上方」上ノ人ガタ。身分貴キ人ヲ（ウヘ人ガタ。貴顕）

いうつかた　狂言池牛馬「此馬ト申ス

マデ用ヰタマヘバ下業、沙汰ニ及ビズ」

うへうへ（名）「上上」上ノ人ガタ。ウヘツガタ。狂言池、土蜘蛛「うつこ人ハ申ス及

バズ我等ヲ如キ者ニテ」女房詞（元禄）「女中衣ハ紫深メ少、上上方ハ青

ガ今ニカハルイモナク」

うまーきたし「鱧腸草」草ノ名たかさぶらうノ古名。本草和名、上三十一鱧

腸、字未詳多之」（倭名抄ノ）

うまざいなし「孫」孫男、孫女ノ義。うまご、孫姪ノ義」

兄弟姉妹ノ男孫。女孫ハルヨウまごめひと云フ

倭名抄　二十八　男子之子為孫孫」男、亀萬古平比、女、亀萬古女比」

うまざけ（名）「味酒」（神酒ヨリ三輪ニカケ甚ミノ音ヨリ三室ニカケ醸ス）

神名備ニカケ吸ハルヨリ鈴鹿ニカケ

三輪山、三室山、神名備山、鈴鹿国ノ枕詞

万一十一　味酒三輪乃山」同七六十一「味酒三室山」同十三五十一「味酒ヲ神名火

山」倭姫命世記「味酒鈴鹿国」

うまぶせぎ 馬防 馬柵ノ條ヲ

うまぞろへ 馬揃 行軍ノ馬ノ良否ヲ 試ムル ノ間 馬 高郡讃山内氏

「今度、京ニテ馬揃アルベシト承レバ此ニテ天下ノ見物ナリ」常山紀談九、秀吉

大坂ニテ馬揃ノ時千貫矢倉ヨリ覗ヒ見ル馬ノ大クタクシキニ乗テ紅ノ皆ヲ後

騎ニ付ケル者アリ 徳川家ノ士成瀬ノ吉ナリト申ス」

うまとり 馬取 馬ノ口取 執鞭夫

うまづかさ 馬司 うまのつかさ

うまのかみ 午貝 午ノ時(正午)ノ至ルヲ知ラスルタメニ法螺ノ貝ヲ吹キ音立ツルヲ 古ヘハ

時ノ至ル毎ニ吹キリ、千載一ノ例 「今日ハ午ノかみヲ吹キ忘レタリ」アヲミ近ヅ

キヌラム」

森むらや製

何ぞの馬の骨(生ノ尸ナリ) 素性ノ知ラヌ人。

馬の耳に風。馬の耳に念仏 言フヲ聞キテ感セズ 蛙ノ面ニ水ト云フ同ジ

うまいくさ 馬軍 (二)騎馬ノ兵士 騎兵 天武紀ノ「騎士」継体

進ス (三)騎兵ノ戦。騎戦

うまいしや 馬醫者 ウマクスシ。馬ノ疾ヲ療治スル醫師。馬醫

うまいち 馬市 馬ヲ売買スル市。

うまいれ 背負

うまうま 旨旨 (元ト乳時ヨリ知リテ食物ニ特レル付リ母ヲ おしゃぶりこつも

是レ ねんま 三ヒ約チ乳母ヲ ままとこ 小児ノ語 食物。タベモノ。

うまうま(副) 旨旨 (旨く旨く)ノ畳 巧ミニ、手際ヨク。

一陌メタ

うきがし 馬借（馬ヲ借シテ人ノ荷ヲ運フ者）

馬ニテ荷ノ荷次ヲ業トスル者、駄賃取、馬借。

（歌嬉歌）

うまかたのしゃうじ 馬形障子

うまさく 牧（馬飼ノ意ヲ呼カ、うたがひ、うたがき（歌垣）或、馬置ノ略カ 稲置、うまぎ）約メテまきト云其俗ヲ見ル 天智紀 十三

「多置牧而放馬」後考抄 一五 牧、無萬岐」名義抄「牧字キ」

うまきとの 武徳殿（馬場殿ノ義ニモアルカ） 武徳殿 後考抄 十一 武

徳殿、年萬岐止乃」

うまさく 青草（「島草ノ誤カ」）今のけいとうトモ云フ 本草和名、上四十「青葙、字未佐

久」（後考抄）醫心方、一四「青葙子」

うへさま、びろう 上巳日和（往時、相模国小田原海上三数十日和ノ後ノ

ヲ称シ元禄、常山紀談、九「豊臣秀吉小田原（相模国三浦郡）征伐「秀吉、城ヲ圍

マレシ間、五十余日、会稽カニ成ラカリ日ヨリ小田原海ハナキ日ヲ

上巳日和ト言ヒナラハシケリ」

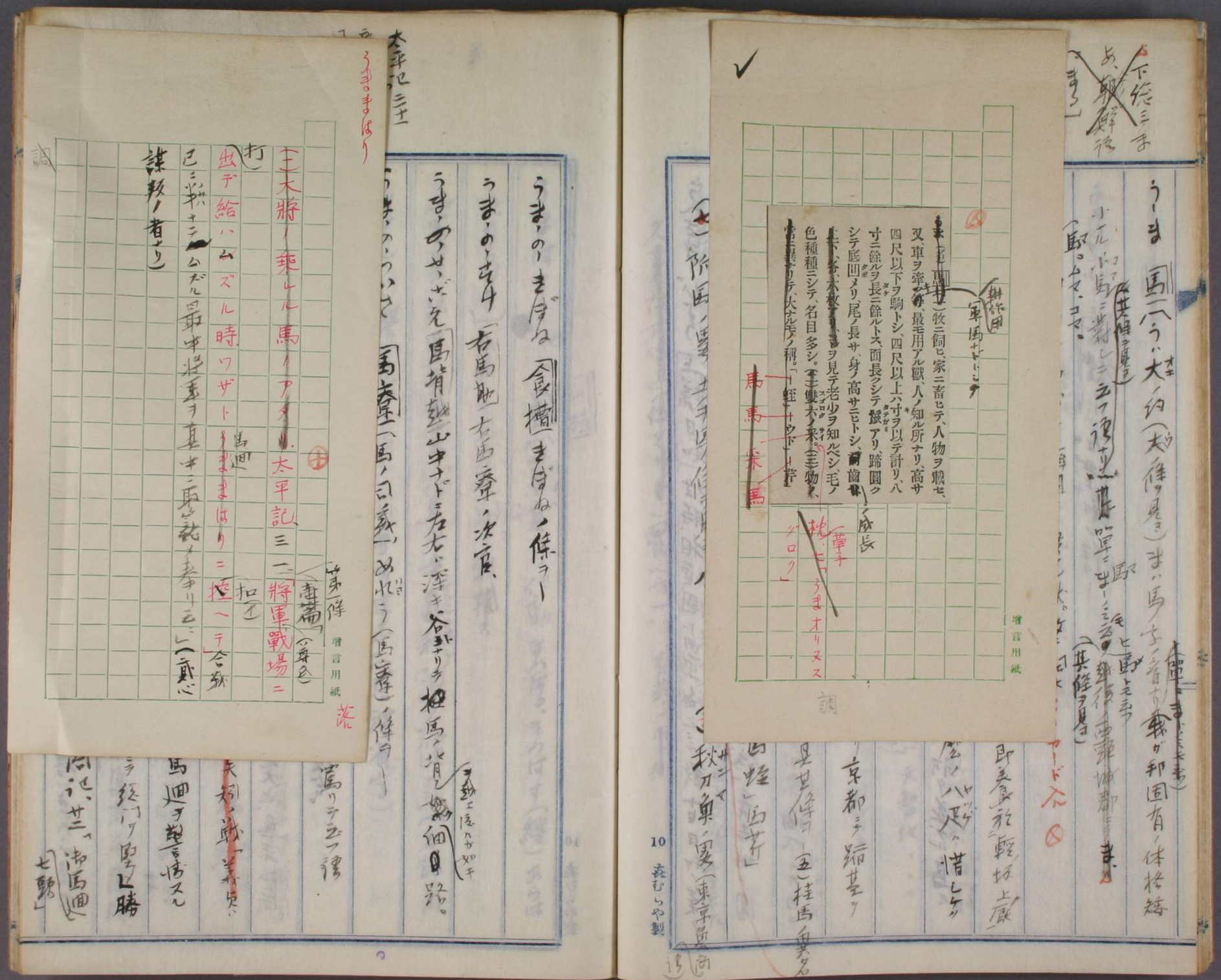
うへのみやし 上不見物（上ニ立ツ物ヲ見ズ、意ナル（ヒ）

人ノ掛物ノ無上ナルヲモ云フ 新撰、北、二「マクハヌヨ、羽ヲ並ブル鳥モ

アラジトヲ人みなやし、空ノ面路」

うへぐんと ぐん 右辯官 辯ノ俗ヲ

うへばくや 右僕射 左僕射ノ俗ヲ



太平記三十二

うまのこまげな　食槽まげぬ　一條ヲ

うまのこ　左馬助　右馬寮　次官

うまのつかさ　馬寮（馬ノ司義）めれう（馬寮）一條ヲ

（十）大將ノ乘ル馬ノアタリ　太平記

出デ給ハムズル時　ワザトまま　馬廻

己ニ勝ニ　ムだん　最中ニ　直キ　馬ヲ乾ノ奉リ云ヒ

謀叛ノ者ヨリ

（十一）牧ニ飼ヒ家ニ畜ヒテ、人物ヲ戰セ、又車ヲ牽ミ、最毛用アル獸、人ノ知ル所ナリ、高サ四尺以下ヲ駒トシ、四尺以上六寸ヲ以テ計リ、八寸ニ餘ルヲ長ニ餘ルトス、面長クシテ鬣アリ、蹄圓クシテ底凹メリ、尾ノ長サ、身ノ高サニヒトシ、耐齒ハ上下各六枚ニシテ、ヨヲ見テ老少ヲ知ルベシ、毛ノ色種種ニシテ、名目多シ。（雙ノ来ニ三物ヲ、常ニ裏ヲリテ、大ナル馬ノ稱。「一駑　一ウド　一芸」）

馬馬　柴馬

（章子　枕ニ　うまオリヌヌ　ゲロク）

（馬ノ成長）

（軍馬サドニ）

（其條ヲ見ヨ）

（其條ヲ見ヨ）

（其條ヲ見ヨ

うま　馬（うま、大ノ約（大体ノ意）ニシテ馬ヲ省キ、我ガ邦固有ノ体格短小ニシテ小馬ニ類シ、ニ云フ）其産地ハ野ニ生ル（野ニ放ツ）ト云フ。

（二）應神天皇ノ御代、百濟國ヨリ渡セル獸。牧ニ飼ヒ……ヤード入

應神紀十五年八月「百濟王遣阿直岐貢良馬二匹、即養於軽坂上厩、因以阿直岐令掌飼」　雄略紀十三年八月「宇麻ノ八尺ノ惜シケリモナシ」　推古紀二十年三月「宇摩」

（三）端基ノ大キク高キモノ。蕃駑ノ小馬ヨリ移シ渡リ、京都ニ端基ノ馬ヤクラヤト云フ。（三）双六ノ具其條ヲ見ヨ。（四）将棋ノ具其條ヲ見ヨ。（五）桂馬奥名ノ如ク物ノ常ニ異ナルモノ。（六）冠ニ冠ル語、「馬鹿冬」「馬蛭」「馬方」

（七）附馬ノ略、土手馬條ヲ見ヨ。

（八）秋刀魚（東京風語）

森むらや製

太平記三十二　四郎義矣

スミ

うまのこまげた　食槽　まげた、條ヲ見ヨ

うまのこやま　右馬寮　右馬寮ノ次官。

うまのせ　馬背　山中ナド、右ノ如キ谷ヲ渡リ、極馬ノ背ノ如キ細路。

うまのつかさ　馬寮（馬ノ司ノ義）めれう（馬寮）ノ條ヲ見ヨ

うまのはな　馬鼻（生ノ戸ノ意ナラン）人ノ素性ノ全ク窺リテ知ラザル者

「何ノ馬ノ骨カ知ラヌ奴」

うまはなり　馬廻（二）乘馬ノ大将ノ周囲。太平記十四、矢部ノ戰「義矣、カネテヨリ馬廻ト聞ヘシ兵ヲ七千騎ニ騎屋ヲセテ」（三）馬廻ヲ製ス情ヲ騎馬ノ士隊、馬廻組、應仁記二、六郎ノ馬廻バカリヲ従ヘテ勝元ノ手勢五ヽ諸國被ル官馬廻　衆六郎ノ騎　太閤記、廿二、御馬廻　七騎

うまはる 自ロ 蕃殖（播ノ自動、まとふ、まとはる（經）よたたふよたたはる（横））殖ユ 二ヲユ ヒロガル。名茶化ノ「一氏蕃息更者」高姓仁賀化ノ「戸口滋殖」雄呈化ノ「女産児」（名詞）同

「ノ夢生」

うまびる 馬蛭 馬蛭ノ古言 倭名抄十九ニ「馬蛭、蛭之大也、無末以反」

うまゝみ 旨（ニ）旨キ味ノホド（三）巧ミナホド上手ナ度合。

森むらや製

利殖

うまはす 他ロ 利（蕃息ラシメル）ノ他動 まはす（經）まはす（ヨ）あらはす」貸ニテ利息ヲ取ル、利殖ス

雲異記中第三十二「貸用米息利酒不償死」（名詞ニ用ヰタリ）訓釋「息、イ良シ」利、于万皮志」（皮ハ波省字）

~~「馬長（一）神事ノ流鏑馬ナニ、~~

~~（二）行列ナト、騎馬ナノ長ナル者ニ、文化四年二月廿日、御用~~

~~ノ儲ニ「肯流鏑馬ニ二騎射ニ馬長三騎渡馬場」（終馬ナ）~~

（三）

うまゝヤ 厩（馬屋ノ義）馬ヲ飼ヒ置ク家、馬小屋、
倭名抄十六「厩、無末反」
うまゝヤ 驛（馬屋ノ義）道路往來ノ食ノ為ニ駅馬人夫ヲ備ヘ置ク
宴、古ハ三十里毎ニ（六町一里）設ケ置キ、後世又モ近ク旅宿ナド
アリテ市街ヲ成ス、今ツキ宿。宿場。
天武紀上「驛」倭名抄十六「驛、無末反」名義抄「郵ムマヤ」
うまゝヤ 馬小屋 厩ニ同ジ
うまゝのもの。
うまゝのたひのもの 驛路鈴（驛傳ノ義、傳天ト五ノ星ナリ）驛路鈴ニ同ジ
驛鈴、堀川百首「雑、食馬場ノ関ノ風寒ク見ヲ吹ノ音ニ驚クうまゝのたひの鈴聞ユ」
新古帖二「旅人ノ山越エワビヌ夕霧ニうまゝの鈴ノ聲響クナリ」

うひまゝ 初孫 始メテ生ミタル孫。
うひまゝ 初見参 始メ見参スル、初対面
うひ、ごと 初琴 琴ノ習ヒ始メ 淫初習 イロケキ、琴習ノ人モアメル日
円寂ノ「浮成ん うひごと」
うひ、ごと 初事 始メテスル事。業務。初義。二月ニ春日使ニ参ル
始メタル うひごと ニオボセテ」
うひ、やまぶみ 初山踏（一）始メテノ山踏、初登山（三）始メテ河ノ道
ウヒヤマブミ
入ル
初琴
うひし 形ニ 初雅 初ミヤビアリ、雅シ 神代紀上ニ「古風雅地雅之
時」日決「雅、字出ヒ也」出雲風土記、意宇郡「出雲国神社
初ノ雅国ナルカモ、初国ハサク作ニセリ」

ラーひよう 雨氷 木の枝ノ樹木其他ノ地物ノ氷ヲ纏ヒたる如ク白マハ、
モノ。天候ノ極メテ静穏ナル時氷點下ニ冷却セル雨滴ノ雨ト氷ノ中間ノ
マニ降リ来リ地物ニ衝突スル瞬間ニ直チニ氷結スルナリ 材氷 雨淞
又霧氷トモ云フト霜ニ似テ樹木ノ枝又ハ地物ニ一面ニ花ノ如キ氷片ノツクモノナリ
霧ニ河戻ニテ成ルモノニテ極寒ノ地ニ生ズ 信濃ノ諏訪ニテハ木花ト云フ
霧淞 字林「寒ニ冬結朱如珠見晛乃消 魯謂之霧淞」
うぶ(名) 産生(ウブ)(生ニ面ス、さぐらふ さむらふ 産)(一)子ノ産ヲ云フ。
多ハ接頭語トシテ用ヰル「産屋」「産婦」
(二)産シ先時ニ云フ。兼澄集「独テキルム、うぶノ黒髪ヤブリテ、変
シル筆ハ心細シヤ」(三)本貨ノ失ハズ飾ツテキイウヒ〜シキ。「うぶノ娘」
「産紡」(「うぶノマ、」)

△むきぶノ神
ヨ、うぶノ神ト
モ云フ

うぶ-がみ 産神 うぶノ神ノ名 三同じ
うぶ-ざい 産子 産シ産チタル子。ミツコ アカゴ 野田家千字文「姑獲取
孩」(動植名彙付録)
今昔三十七第四十三 産女ト云フ。女ノ子産ムヤ死ニタル。産
ニ成リタルト云フ人モアリトナム語リキ(元)
女ノ妖怪「産女児ヲ哭ナセテコレ抱ケト云フ」此
ウブスナマ、ビ
容長見聞雑録 (今ガ)緑叮乳母ト云ヘバ女獲鳥ガ来ルト云ヘバ
身ニ深ミテ恐ロシキ程多ハル云(嬰児笑覧六)
うぶ-め 姑獲鳥 産婦ノ化シタモノ(支那ノ想像ノ鳥、産婦ノ化シタ
傳説ニ)
夜中ニ走行シテ児ヲ害ス 鳴音小児泣クニ似タリトモ云ヘリ
本草綱目ニ「姑獲鳥、産婦所化 陰悪之妖」
うぶ-め 産目 産婦ノ産児ノ風服。
うぶ-まり 産神詣 産神ニ参詣スル事

うぶやしちし「産屋」貴族ノ家ニテ小児出産アリテ三夜五夜七夜ニ親族等ヨリ産婦ノ衣服嬰児ノ襁褓其他飲食物等ヲ贈リテ祝賀ノ響ヲ表シ（後世俗間ニ産屋トモ云フ）

『類聚国史』天暦四年七月廿七日「是夕藤女御有産養之事」

拾遺。ゆゆ。「産屋ノ七夜ニマヒリテ「君ガ歴」ハ豆高代ヲ数フレバカツク〳〵今日ブ七日ブリケル」空穂物語「三日ノ夜、一宮うぶやしきにまゐる吾孫大将

後七日夜ナム東宮ヨリ例ノ御ドラヒアリケリ」紫日記「三日ニ当タリテ

夜ハ宮司ノ火夫ヨリ始メテ御うぶやしきに仕ウマツル」

うぶーだて「産立」誕生アリシ家ニ親族ヨリ鯛ヲ贈ル式、車図ニテ記シ

ヲ立テ　毎年記（天文）「うぶだてに島子鯛ヲ折ニ買キ贈ル

後世（俗語参考）

三代実録、九、貞観元年廿日、諸国ニ令シテ志那神ヲ祭リ、産住場ノ穢ヲ除カシム

うぶすな、「産土」（本居）「産土神」「産土ノ神」「産土ノ社」「産土ノ義」

（一）人ノ生ニタル土地、産ノ地、産ノ地、産ノ地。

（二）うぶすなの神、産土ノ神、産土ノ社、産土ノ義

（三）うぶすなの神、産土ノ神、産土ノ社、産土ノ義

（流）

其地ヲ敷キマシ鎮マリマス神、地主ノ神、鎮守ノ神、氏神トモ云フ

（日本書紀）「産土」（本居）「産土ノ神」「産土ノ社」「産土ノ義」

（諸人産土ノ神ノ義）

か

大和コリ二年ニノボリ云ヒ」陰本・松本村雨庫本「今日百二十日ノ間是
明年坂井ノ春 院本日本武尊吾妻鑑、四「殿美」ウ生マセル ウム
神ニモ恨ミアリ」
うぶ・ぞう 【産・剏】 小児生レテ初ノ剏ル
七日目ニ産モ
うかひ・ぶね 【鵜飼ノ舟・鵜】 鵜飼ノ用ル舟、黒ニテ 鵜舟 鵜飼舟
千載。夏「早瀬川水派サカノボルウカヒ舟」新千載、三。「鵜
舟漕ぐ石川ノ波ノ音深ケテ」
うかは 【鵜舟】 うかひぶね（鵜飼舟）ニ同ジ 其條ヲ見ヨ
うぐいす・ぶね 【古文左武・文學】 武術文共ニ学ブベキ。文武ノ車ノ両輪ノ如
こしゝ意、 武家 徳川百箇條

うまやのーかぢ 【驛鈴】 うまやづたひのすぐ、條ヲ
うまーやく 【馬役】 武家ニ馬ヲ乗リ馬ニスコトヲ掌ル役人、馬乗。
うまやごえ 【厩肥】 馬小屋ノ為ニ敷ク草ナドノ糞尿ニ混ジ腐ラセタル肥料トスルモノ、
うまのーぶす 【馬附子】 （附子ノ毒草ナリ あしびノ語原ヲ見ヨ）
馬酔木ノ異名。
うまやだち 【驛館・驛舎】 設ケタル館。 猪館 神社ニ。ウ「久良等至自ニ
自海ニ云ヒ、増賀ヲ沙城ノ居 往還路、驛ノ 「海石榴市ノ巷」
うまやのーべったう 【厩別當】 べったう（別當）ノ條ヲ
うまやのーをさ 【驛長・驛ノ長】 驛ノ事ヲ掌ル者、青墓ノ驛ノ長者ナド云フモ
是ナリ 大鏡上「明石ノ馬ノ所ニ御覧ジテ セミメタマヒテ」ウ 女ノ女ノイミニ
ウ思ヒ出ケ事ヲ御覧ジテ作ニセタイ（詩歌）（菅公ナリ）

うまのよそひ（騎射ノ儀）

うまのよろひ（馬鎧）乘馬ノ面ト頸ト胴ニ懸ケル具布ニ鍍金シタ（後世ナル）

銀行革ノ件ノ紐トツケテ作ル　軍防令義解「馬甲」

学山紀談、九、小田原征伐「毛吉公ハ緋威ノ面鎧、唐冠ノ内曽ニ

金ノ瓔珞ノ馬鎧カケタル七寸アル面馬ニカロシテ」

うまのとがあ（馬冠）かさとがあ（傍）

うまら（荊棘）（うばら（荊棘）ニ同ジ、ムバラ、イバラ。

万二十三路ノ辺ノ宇萬良ノ指ニ云ヒ（嚴經音義「棘、宇末良」

うまらつよ（副）旨（ハラハ、恥辱、さまみさらみ、さむら、いら）

旨々　純ナル　十九、十　大海陸宇摩羅耳聞コレモチ飲セ」駅宇但。

「美飲喫哉」

うまのさき（馬長（騎馬ノ長ノ義、行列ノ先駆ニ立ツ童ナル（キカ）

六月十四ノ京都ノ祇園社ノ御霊（会）ノ神事ニ騎馬ノ長ノ衣服ヲ著

飾リテ　騎馬ノ長、見物トシテ放免ノ附物ノ数

枕草子、四、ハ、ハ、ハ

うみ、うめ　熟梅　熟　これ梅、一夷。人生葉。雑上「葉隠レニ云ハルト見エシホドモ

うみ、うを　海魚　海ニ棲ム魚ノ和　ナク、こゝうみ梅ニヨリテルカナ

うみ、ちは　海蛇　(一)エビヅウナギ　(二)ウミ(ビ。

うみ、じ　生字　語物語物ノ一音ノ毋音ヲ引クイ、つき(月)ウキイト云フ

ガ如シ　龍　(字ノ音)生む、引く意

うみ、ち　膿血　膿ニ血ノ混ジタル

うみ、つび　海螺　ホラガヒ、ウミツブ。　字鏡ニ「九　高脚大者、海豆比、

(新)　(本名、下四ヶ)　海螺、字美ツ不、保良加伊

うみ、ちう　海鳴　海ニ棲ル一種ノ鳥ナリ、海底、地震ナドニ因ル、

うみのこゝろ　生親　已ヲ生ミタル親、産父母。(養父母ナドニ対ス)

うづまる　自四　埋　(うづまるノ対　伊　活用　集ナカ本書ノ基像)

(ウヅモル、ウマル)

(下ニ経済　無用　変化　ウカラ(別)ウカル(理解)

自然ニ類カ

うづもる　同じ、ウマル。(うづまる冠リ名詞ニ受ケ活用ス(むヲ見ヨ)

うまれ、おつ　自　上二　生落　生レ出ヅ。

空穂俊蔭「うまれおつるスナハチ姫、已ガ如子懐抱キテ」

うまれ、ざまひ　生振　人ノ生レツキノ満足ナラズヲ

うまれ、たち　生立　人ノ生立ウ、サレツキノ資性

うまれ、たて　生立　立ツ、始ム意、拙言ヨリ云フ、嘲ト云フ

生レ出ヅ、其時ナルヲ　初生

うまれ、づき　生月　其人ノ生レタル月　月　月

うまれどし 生年生ニ元其年、
うまれ、ながら(命)「作生」生レテソノ々、生ヒツキテ「一國王ノ位ニ居ル」
うまとき 馬長(一)騎馬士ノ長ナルベシ 吾妻鏡、八文治四年二月
十七 鶴岡八幡宮流鏑馬「二騎射」馬長三騎渡馬場」(儀
式ノ終馬ヨリ)(三)

(雲雨ノ如ク群リ集ル意ナラムカ)

雲雨 浮塵子 形蟬ニ似テ長サ二分許 野宴出ニ此節
光リ知アリテ多数群集ス 稲ノ若葉、及ヒ花ノ液ヲ吸ヒテ枯シ損ル大
害ヲ生ス種類多シ
うんーか 雨(二)くもりがち みト(三)物騒ヒタ集ル様子ノ
重勢ーノ如ク集ル」
うんーかく 雲鶴 綾ナドノ織模様ノ名 雲ト鶴トノ象ヲ織出ス
袍ト用ヒタ雲ハ鶴袍トモ云フ 多クハ親王ノ料トス
うんーう 雲雨 古クハ連聲ニテ(ウルト数ヘシ)うんぬと發音セリ 詩經傳「山出雲
雨以潤天下」(三)男女ノ交 ~~大雲雨賦「楚襄王夢ニ婦人曰~~
妾巫山之女朝為行雲暮為行雨朝ニ暮ニ陽臺之下」

(召喚殿其雲ニ)

原文見ヨ
長恨歌ノ
見ル

文選高唐賦「昔者先王夢見婦人曰願薦枕席王
(二)因幸之而辭曰妾在巫山之陽旦為朝雲暮為行雨朝朝暮暮陽
臺之下」(等文)自劉延年之子行「為雲為雨楚襄王」本多自清
平調詞「雲雨巫山枉斷腸」例ニ先、齊院司式「草綱錦」名
目ナリ。繧繝ハ海人草ノ色ノ濃淡ニテ「高麗、陵、繧繝端也」
侍前半出空用結句後半出空用言也」
枕草子ハ「(一)昔ハ草子ニ用ヒタリ。(二)草子ノ語クダリ。
(三)草子ノ語クダリ。」
うんさ、「草」(うん、長紙ニ書ク。添フル辞、原ヲ書ク。王子、斜子)
小児ノ遊ビ、草ビ。

うんげん 「繧繝畳紬」ハ畳リ間ル義、繧ハ借字（畳ト雲ト二系統アリケリ）

（二）縞模様ノ名 縞ハ黄、緑ニ赤、藍、浅葱等ノ色ヲ並ベ交ヘタルモノハ其間ニ花形菱形ヲ織リ出シタルヲ畳織錦トシ此錦ヲ縁ドリタル畳ヲ畳織縁ト云フ、読例：うげん、齋院司式「畳織錦」名目抄「雑物 繧繝」海人藻芥の？

伊勢物語「玉簾、陰、繧繝端せみ」

枕草子、八、ここも昔なほ用ゐる「うげんべり」畳ノ縁リテ第一ニ

キタル（三）畫工ノ語、クダドリ。

うんーさ、「畫」（うん：息張ル彩ハ添フル絵、尿ヲ出サ、玉子、茶子）

小児ノ後、糞、ばば。

うんさくいは　雲谷派（畫伯雪舟周防國山口ニ雲谷寺ニ住シタルヨリアル）畫伯ノ名、雪舟流ニ同ジ

うんーさん　「雲根」（二）山ノ異名、雲ハ出ヅリ出ヅ　宋、孝武、造作樂山ヲ

「積水潟ノ雪根」（三）石ノ異名、雲ハ岩石ノ間ヨリ出ヅ　賈島ガ「移石動雲根」

うんーそう　「運送」（二）物ヲ運ビ送ルコト（三）一ハ。チャポナ

うん〻うん（名）云云（二）事多端ニシテ其所ニ用ヰ諸ヶ省略ス

ファ。漢書、汲黯傳「上方招文學儒者、上曰吾欲云云」註、云フ語。斯マ云フナリ。遂ニ云

「云〻猶言如此如此也史記其辭也」說苑、公冶篇「君子幾

當從其子之知、豈必待其子云〻」然後知所

以斷獄哉（三）句トシテ「と云へり」トナリ、書要

鏡の建長四年九月三十日「於鎌倉中所々民家、所註之酒

壺三萬七千二百七十四口云〻」中御門宣胤卿記、文明十二年十

月二日、神社日供事「一向無敬問事、諸家無敬神歟云〻

余敬神異于他以來次第可接云〻」則「待之」

うみのかみ　神海神　海若。神也。「陽侯」

うみの月　海月（字、文字通）くらげ、異名

夫木三十七「我が妻に海の月ラン待チワビ人ヤ骨ニアフ夜アリヤト」

うみのはは　生母　我ガ生ミシ母。（産母ノト意ヲ）

うみのみやび　海都　龍宮ニ同ジ

草根集（長禄・寛正ノ頃）「コヽニテ、ナド遠ハガラム人住マヌ海の都ノ（アリカナリトキ）

うみぶね　海船　海運

うみべ　海辺　うみべたニ同ジ、ウミバタ、

うみばた　海端　海ノホトリ、ウミベタ、ウミベ、海浜　海濱

うみべた　海辺　（へたノ俗ナリ）ウミベ、ウミバタ。神代紀下五「海濱」私ニ「手」（美倍太）

うみを 續紀ニ見ル麻続ウミノ

ちみぢ 海藻ノ(三)又一種ノ海鳥、肥前ノ平戸ノ海ニヨリ形ハヨリ

うむムルメ 仮下ニ 埋(二)うづむ(四段他動)ヨビ、ウヅムル。

古語拾遺「埋溝、古語、美曽宇女」名義抄「埋、ウム、ウヅム」太平記、十五、

建武二年正月十八合戦「其死骸、谷ヲうめ溝ヲうづみケレバ」追手ノ者ニハ

道平ニカヒ成テ」此後四段ニ活用セルノカ 駿字記元年二月「知御骨埋

ミ」群書類従一本、古語拾遺「埋溝、美曽宇キ美」トアリ 清ク

(三)湯ニ水ヲ加ヘテ温クス。紫日記、上「御湯殿ニ御湯マヰル ニ、ぬるき

合婦情慶取次ギアラめ、元ニ右馬汲ミヲヌルテ元ニ」

建武年中行事、有十一日「主殿寮御湯マヰラス御槽ニ取ルヲ召ス

ホトニうめ 又(三)うめ 條目見コ

森むらや製

?

主殿寮ノ所明ヲ所ニ充ル、埋ム「落書」

うん 元ん、くわん(呉)「雲烟過眼」眼ニ見テ心ニ留メズ、一時見過スノ

蘇東坡寒食帖記、書畫「見ル者、雖時復蓄ヘ之ヲ為

以取去亦不復惜也」辭宗「烟雲之過眼百鳥之感耳」山豆不

故也接之去而不復念也」

うん 感 (誌ノ音便) 骨ノ音便ヲアラハセル、承諾スル形、

うん(感) 感動詞ノウノ音便 呻ク聲、「天子ノ強ク要セラルト云ノ

ノケブル」うんく ウナル

う感 (うめく、うたく、うるノ語根) 呻ノ聲、ウン。字治拾遺、三「うト

云ヒテ後方ニヨリ伏シカヽリケルケ」未来ノ強ノ要セラレトキニナル

三條

うんと（副）〔カム時ニ普ク聲ヨリ〕（一）カヨコメテ。「大石ヲうんと持チアケル」「うんとリキム」「うんと張ル」

「見と端ル」（三）多ク。タクサンニ。ドッサリ。「うんと持テコイ」「金ガうんと溜マル」「うんと口キノメス」

うんにや（副）〔否ノ音便〕否ムニ意ヲ強ク。イヤイヤ「うんにや知ラヌ」

うんえき 「瘟疫 疫病。ハヤリヤマイヒ。

うんこう 「芸閣（芸草ノ香ニテ蠹魚ヲ防グヨリ名アリ）書籍ヲ納ル所、図書室。芸苔室。新修古今序「延喜ニ芸閣（宋、聲書ノ官）大納言石上宅嗣（光仁帝ノ御代）図書室ヲ芸亭ト称シ公卿ニ人ニ縱覧セレメシガ始メ也」

うむかし（形）おむかし（條ナリ）

うむかしむ（馬）おむかしむ（條ナリ）

うむき　海蛤（海栗ノ殼ヲ海蛤ト称ス）

蛤ノ古名ト云フ　享保五十三年八月十五日ヲ海ニ由蛤ヲ得時ヨリ

（是ハ真蛤ニ非ズ海栗ノ殼ナリ）

二年支　本草和名下　海蛤　宇牛

うんぞうきう　温州橘　うんぞうきう（條ナリ）

出雲國風土記島根郡ニ宇武賀比賣命（上略）此上ニ蛤貝比

賣　見エバ海ヤノ約轉カト云ハルレド海ヤノ蛤ニ限ラズ或ハ

海ヤノ約轉カ土佐國ハ土佐島根郡法吉郡ニ宇武賀比賣命（上略）此上ニ蛤貝比賣

海ヤ蛤ニ限ラズ或ハ

「海栗ノ殼ヲ海蛤ト称ス」

「海白蛤」

考証

うんぞう　雲蔵　ハマサゲ、カラフゲ、ジヤケツイバラ、

うんし　雲脂　歌ノ垢イロコフ

うんぞうう　運上（二）公物ヲ運送上納スル

吾妻鏡十二、建久三年十月廿日「運上　相模國、土肥沖庄、沖

年貢送文事、云ヒ洋衣、五切、上品八丈絹、六疋、納如九及云ヒ

古付夫銭ノ助弘運上如件」雜筆往来（永正）「併貪公物永無

運上之心」（三）轉ジテ運上スベキ物。商人等營業ノ稅。（稅ノ

條ノ（三）見ヨ）室町殿日記九、永禄六年七月、談「洛中洛外諸

商賈人等座之儀事先規之運上雖無諸役被免許之條

向後急度可上納條事」

えじやうた　自左変

（倭名抄ニ往生キヤウ也）

勢力書キテアキラム（うんぬ倭んぞどさうゾ往生ノビやうヲ取リテノ造語たべし）

うんじざうさよ　運上所　運上ノ銀ヲ取納ル役所

うんじやうかた　運上方　運上所ノ役人

うんそん　雲孫　兄ノコ、玄孫ノ玄孫

うんたい　雲苔　アブラナ。

うじ（豆）　うんず（倭）ヲ見ル

うんじ（豆）　うんず（倭）ヲ見ル

うんぺんかう　雲片糕　菓子ノ名　米粉ノ砂糖ヲ加ヘテ固ノ堅二寸

横寸法ニ於クカル　長時行製ス

催馬樂、梅枝「花ヤカニモ　来居ル鶯ヤ」同、「年ヤ花ヤ」

○倭名抄、梅枝、青梅、サニテ宇女、年女ヲサガス　白女ガ　エラバ倭名抄ノ名ニアゲル

潜言用紙

（二三丈）

うめ（名）梅　（熟實、紅艶ナリト云ヘリ）（一）樹ノ名、高キハ其ノ三及テ早春、衆木ニ先ダチテ花ヲ開ク、瓣、五ニシテ圓シ、其木繁ナリ、香甚ダ高シ、多ク人家ニ植ヱテ、花、香ヲ賞ス、重瓣アリ、單瓣アリ、色、多クハ、白又、紅ナレドモ其外ニ種類甚ダ多シ、實、圓クシテ酸シ、うめぼしトシ、又、其汁ヲ種種ノ用トス。（切又、本草ダ名、下ニ、梅ノ実、烏梅、白梅、牛女、倭名抄ナセ、梅ノキダ）

梅雨ノ時ニ熟ス

梅酢ヲ作リテ

其形ヲ紋所トシテ梅鉢ト云ヒ、移シ五ノ良ニ用ヰル

朝鮮語、梅。

（我ガ邦ニ野生ナシ　初メ烏梅ヲ堅用トシ）

（倭名抄ニ見ユ）

（外来）

（其傳ヲ見ヨ）

紀記、見エズ　萬葉集ニ烏梅ヲ詠ミ　ホアリ

用ノ必用ナリ　其

シカ遂ニ樹名ト

名上ヲ加ヘ

巣ヲ経

姫ノ梅食ヒテ

酢ガリタル

えんじやうを　自左変（倩ヲ従生ヲ変ニキヤル也）

勢力書キテアキラム（うん、倩んぜじやうぶ御殿ノじやうを取りテノ造語ナベシ）

うんじやうを　運上所　運上ノ銀ヲ取納ム役所

うんじやうかた　運上方　運上所ノ役人

うんそん　雲孫　孫ノ孫、玄孫ノ玄孫

うんたい　雲台　アブラナ。

うじ（裏）　うんず（倩）ヲ見ヨ

うんじ（裏）　うんず（倩）ヲ見ヨ

うんぺん　かう　雲片糕　菓子ノ名　米粉ノ砂糖ヲ加ヘテ固メ堅ニ寸

横ニ寸法ニ折クカル　長崎ニテ製ス

うめ　梅（我ガ邦ニ野生ナシ初メ烏梅ヲ薬用トシ（倩ヲ従生ヲ見ヨ））

（朝鮮語、梅。野梅ノ実ニ当ル）（紀記、見エズ萬葉集ニ烏梅ヲ歌フ）（外来）（其條ヲ見ヨ）

烏梅　字ニ書キテ烏梅ト訓ス　字ニ書キテ烏梅トモ烏梅トモ　薬用ノ必用ナリ其

生実ヲ若シクハ苗木ヲ取寄セテ植エテ烏梅ノ木トスヒシガ遂ニ樹名トナリ

易牙渡リテ斑文アル国ニ使ヒシガ象名ヲ知リシ如シ

・・・・カード・文入れ

万五四　正月　立チ春ノ来タラバカクシテ烏梅ヲ折リツヽ楽キヲ経ム

（三）梅ノ実、梅草ヲ、三、廿八段

酸カリタル

女

姫ノ梅食ヒテ

うんーぶん「雲文」模様ノくもがた。

うんーめいーぶん「温明殿」禁中殿舎ノ名。紫宸殿ノ東西ニアリ。殿内侍所賢所ト云フ。「温明殿、カンメイデン」

うんーぱ「運搬」（うんしゅつ）輸出ノ條ヲ見ヨ。運送ニ同ジ。運搬。

うんーろ「云為」云フト。為ルト。シワザ。言行。

うんーのーつき「運尽」滅亡ノ時期。文選、嵇士賦序「寧家運盡必於顛仆」

うんーだぶう「醞醸」カモシテ成ル。

ウンスンジーカルタ（ヨ）骨牌（カルタ）一種、菊菊牙引傳来ノモノ、うん（菊南牙）註

Uta（一、義）に挿入ル牌五枚、きんと称スル五枚其他数種各数枚ツヽ合

計七十五枚ニテ行（取）其（トカタ）取方ヲ学ノ骨牌ト異ナリ（大正四年刊行日本外来

語辞典ニ委シ）薩州府志（天和）七、宇宙須弥ノ留多、其法有者

千二

うめがえだんぶ　梅枝田麩　だんぶノ條ヲ

うめがか　梅香　梅花ノ匂（ニホヒ）　万葉、典籍（キカ）　古義　六物解

古今集上ノ歌ヲサケテ　別考

森むらや製

うもす　蕅　[illegible]

生義抄「蕅」　うもせニ同じ其條ヲ見ヨ

うもれみず　埋水（蕅葉ノ陰ニ隠レテ見ヱズ）　人金葉ノ歌ニ「モラバヤ　細石川

ノうもれ水影ダニ見ヱズ恋ムト」

うもれゐ　埋井　埋ミタル井、定レシミヅ

うやぶ　他四　敬（ウヤブ、キヤブ、ヤマブ）　推古紀ノ「茶拜（ヤビ）」

[illegible]

うらよ　雨餘　アマアガリ「一ノ春月」

うらよりやう　禹餘糧　ハツタイイシ

うらぐるくる　自下ニ「楽」（心化ノ約ミモアル九）　（敬語ニうらがまとれ）

面白クナル　（多ク酒ニ醉ヘバ心ニツキテ云フ）

古事記中（　）五　天皇宇羅直是新嘗之大御酒一而御歌曰

五ニ曰下（　）四　於大海辺宇良直而大御宴賜

うらがまと　他四　「慰」（楽ぐ、敬語、自動、他動ニ変ズさぐ、さがと

（提）　ナダメタマフ。出雲風土記、仁多郡、三津郷ノ祖

神、海ヨリ乗船而来ニ、八十島宇良加志タマヘリキ止マズ泛キマヒキ」

うらムーリう　「有集院」茶道ノ一流、織田有楽斎（源五郎信長、長益）ヲ祖トス

うめの一はるーかぜ　「梅花笠」　梅花ノ花片ノ並ビテ中ノクボミタル笠ニ張言（テ云

フ語、古今二十、大歌所、御「青柳ヲ片糸ニ縒リテ鶯ノ縫フテフ笠」

「梅の花笠」（笠ヲ上ニ上ケ縫フテフ）

うめのはるーかぜ　「梅花型」　小芽ノ白梅花ノ一瓣ニ似タモノ、指ヒテ玩具ナドトス

大木　春風ニ枝ヤ折リケム　ミチノクノ雄島ノ梅花貝

芦漕ぎ草十三　五「花貝、梅花貝、極貝、小貝、群」ヲ拾フナドモ云ハリ

うめーばち　「梅鉢」（梅樹ノ義、雅楽ノ大鼓ノ桴、鼓、玉ノ制、其五本ノ木ヲ

集メ鼓ヲ五出セシメ、其ヲ梅花ニ擬シタル象ナリト云フ（海録九）」

紋所ノ名、五葉縅ノ梅花ヲ正面ニ図シタルモノ、葉柄ノ中央ニ貫セシヤウ

書キ花ニ様ニ正面ヲ梅ト云フ　五　単ニ図ヲ中央ニ一ツ、周ニ五ツ書キタルヲモ梅桜

十六ノ日ヲ六曜星ト云フ故ニ

うめぼうし 梅法師（擬人ニシテ云フ 法師ハ鼎法師ノ略）

梅干ノ異名、牧撰犬筑波集（慕況）ニ「花ノ色ハウツリニケリナ 梅ぼうし」

うめみ 梅見 郊外ノ梅林ナド遊覧ヲ楽ブ 梅

うちんず 化粧 薄（薄みすノ音便、かろみす、かろんず（軽）きぬみすあつまんず（厚））ト云ヒ、略ス「其志ヲ薄んず」

ちばくち 焼口（老婆ノ歯ナキ口ニ云フ）人ノ歯口ニ云フ汝ノモノ 茶筌ノ

茶筅、茶入ナド云フ

面桶ノ口ニ歯ノ作リツケテ焼類ト云フモ焼口ナリ

ちめがさ　梅酒

うめ　カン　「梅美人」年美人ニ梅酢ヲ加ヘタモノ

うめだよみ　梅暦　「山中無暦日梅花ヲ春ノ知音ノ友」

梅花　下野頭　冬寒梅ノ奏花ヤ今日早咲キノ梅暦」（俳三集覧）

うめしも　「梅圓」一種ノ酒、青梅二升、一夜灰ニスル習ハシ水ニテ洗ヒ白砂糖

七斤古酒五升壺ニ封ス二十日経ヒバ成ル　味損セズ一松尼寺記

うめ茶　「梅茶」（梅ヲ五銭ノ国ニ用ヒ茶ヲ入レタルモノ）散茶（七十四）

茶漬（ヲ取ル）生活ナリ

元禄　前江戸牡丹ニテ五寸ノ遊女ノ形、「馬本洞房遺園（寛保）

「近年散茶見世棚ヲ入テ、大格子ノ内ヲ局座ニ拵ヘ」

散茶ニ對シテもめ茶ト戯ル云ヒケル云ヒ

（連歌ナドニ梅の暦トミル）

ばい

10

うらあれば　裏合　二ツノ物ノ裏ト裏ト向キ合フヤウニセナアハセ

うらうらと　（副）「屋々」うらうらヲ二日ビ

うら　心　（裏義、外面ニテラハレズ、下ゴ心、心中ノ意）

ココロ、こゝろ。オモヒ。此語多ク詩歌ニ接続語ノ如ク用ヒル

底心ニ思ヒヲ込メタル切ナル後ナリ　「ままにしたしき情実」四十三「年長者」

万二十。秋八ニ今カ今カト紅解キテ宇良待チ居ンニ月ハ待ヌ」うらさびし」

うらがるし　「うらめづらし」うらはづかし」

後撰十、恋二「我ゾ我ガ身ノうらハ恨ム」同ノ「我ガ身ノうらヤ

限リナルラム」

うらーかたぎ　裏形木（横木ニ摺ル）ムナリ　傳者抄四十貳條具ノ模加太ノ
衣ノ裏ニ模様ヲツケ名ニハウラモヤウ。吉記、安元二年胃サ九日「隨身
（隨身雜色ト金人童牛飼ナド男名晴ノ氏流ナリ）
萌木、裏形木、上下」人車記。保元三年二月十六「金人童、牛飼等裝
束、裏形木」

うらがた

うらがーぶまい　浦賀奉行　徳川幕府ニテ相模國浦賀港ニ置ク役人、
諸國ヨリ出入ノ商船ヲ接ス、外交ノ事ヲモ掌レリ、

島ニテヨシ

うらーがなし　形ニ心進（うらゝ心ナリ）悲ル
万十五　四ノ別ナバ宇良我奈之ケム　源玉葛「無人ヲ誰ヲ意フトカ
大島ノうらがなしゲニ夕ノ御ユル」　吾カ衣下ニオキマヤタヾニ逢フマデニ
うらら（形）（あのびやかれ、れ、うらゝ韓ヒヒ見ル後）
自稱ノ代名詞、我。オラ。（身語ナリ）
うらーあふ　自東「卜合」占ニ當ル。經後撰の雜上「マキテ見ム神ノ
ツカサ（神祇官）ノうらあはせて著キ日影ノ山蔭ノ袖」後紀二十六
「美濃ト越前ト佛占ニ合ヒテ大喪ノ改革ヲ取リ仕ヘマツルラシ」
うらーとく　自下二心解　心ヲ解ク　後撰の春下「春日サス藤ノ
裏葉ノうらとけテ君ヒ思ハバ我レヲ頼マム」

うらーかたぎ　裏形木（模木ニ摺ル）ムナリ　傳書坊四十四哉後具ノ模加太ノ

衣ノ裏ニ模様ヲ彫ケル人ハウラモヤウ。吉記、安元二年閏十九日「隨身

（隨身　猶色ヲ金人童牛ノ如ク用ヰル晴ノ会流ナリ）

萌木、裏形木、上下」人車記。保元三年二月十七「小金人童、牛ノ如ク裝

束、裏形木」

うらがた

うらがーぶまつり　浦賀奉行　徳川幕府ニテ相模国浦賀ニ置ク役人、

諸国ヨリ出入ノ商船ヲ検査、外交ノ事ヲモ司ル、

うらーがなし　形ニ「心進」（うらハ心ナリ）悲ハ心ナリ

万十五　四ノ別レナバ宇良我李ケム　源玉葛　「舟人ヲ誰ヲ恋フトカ

大島ノうらがなしゲニ子ノ御エル」（吾カ衣下ニオキマヤ　ダニ逢フマデニ）

うらぶ　「己」（あのれ、れ、うらぶ轉ジタル語）

自稱ノ代名詞、我。オラ。（身語ヨリ）

うらーあふ　自動「占合」占ニ當ル。結後撰ノ雜上「ワキテ見ム神ノ

ツカサ（神祇官）ノうら亀代テ著キ日影ノ山蔭ノ神」後紀二十六ノ

「美濃ト越前ト佐占ニ合ヒテ大嘗ノ改事ヲ取以テ仕ヘマツルラシ」

うらーとく　自下二「心解」心ヲ解ク　後撰ノ春下「春日サス藤ノ

裏葉ノうらとけテ君ヲ思ヒ、我レモ靡マム」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うらーどろ 裏白 土蔵ノ入口ニ設ケオク戸 幅廣ク一枚ニテ

四方ヲ閉ジル戸ナリ 表ニ裏ニ土塗ニテ表ニ漆喰 裏ハ白漆喰

ニテ塗レバ名アリ 大災ノ時ニ引キ閉ジルニ用ヰル

うらせ 浦洲 浦辺ノ洲 十軍池上三十九「我ガ心宇良須ノ島ノ今

コソハ千鳥ニナラメ」方六 沖渚ニ千鳥妻呼ビ

うらだな 裏店 裏屋 商家ナドノ背後ニ建テタル長屋ナドノ称 貧人

ナドノ貸家ナリ 裏屋

うらーだち 裏立 裏家ニ同ジ

うらーぢ 裏地 衣服ノ裏ニ用ヰル布帛

うらつけ ざうり 裏附草履 草履ニ皮ヲ張リテ作ルナルモノ 内ニ革ヲ入レタル

うらーきん 裏金 陣笠ノ裏ニ金箔ヲ貼ルモノ 侍大将ナド用ヰル次ニハ

裏銀ナリ

うらーばし 形ニ心妙(ハレ(微妙)ノ俤ヲ見ヨ)

ヨロヨロヨレ 厭ノ[illegible]ナリ 愛シ 万十三五「内日刺ス大宮仕ヘ朝日ナス

目細シモ 夕日ナス浦細シキ 雄異化ノ年月 泊瀬ノ小都ニ干羅寅

沙斯

うらーくみ 裏組 くみうたノ俤ナリ

うらーざし 裏流 ハッキリ 豆腐ナド 製スル時、水嚢ヲ伏セテ底ヨリ源ヲ

漉ヲ残ス法ニテ

うらーだし 裏鬢 三味線ノ高ク調子ノ離レタル伴ヲ鬢ニテ唄フ

うらーさぶるしと 自ー上ニ「心荒」心荒び心報昼晩ニテ

ル、[illegible]ズ 久方、一三、「浦佐夫流心ハヤネシ、久方ノ天ノ時雨ノ

ラフ見レバ」四一七「ヤヤニノ國津御神ノ浦佐備テ荒ビタル奇見レバ悲シ

(御機嫌ヲ損ジテ)

(三) [illegible]ル不樂シクん 万二九三「書ハモ浦不樂暮ラシ」

うらー、ざん「裏樹」板ノ樹ノ板裏ニ折ツケタル人

うらしまーたらう「浦島太郎」たまてばこノ條ヲ

うらーがね「裏尺」まがりがねノ條ヲ

うらーじゃく「裏尺」四ニ

うらーめ「裏目」四上

韓国

[illegible]

ウラ〻ウラフルヘ 他ニモ

ウラ考ヘ同じ ウラドフ 神代紀上六「天神以太占而卜合ふ」

卜部幸子氏紀傳 特殊記事 古事記(全仁)の「於太占ニ相而 求何神之心」

他四 占

ウラ 卜部氏記事ノ考ヘ

群神祇而不吉」布斗摩邇

ウラ〻ウラ 裏樹 裏樹ノ樹ノ樹ノ

ウラとまたらう 浦島太郎

ウラかた 卜兆

太占 亀卜ニ顕ハレル象

敏達紀ニ 遣使第一奏其占狀」為忠前百首「思ヒカネ 恋ヒキ

ヨエモノニテ問フニカナヘルウラかたモナシ」

韓国

シテヘ スミ

ウラ人 占 ウラフル。ウラナヒ。神代紀下の「太占之卜筮」万五 壹

岐ノ海人ハ秀手ノ宮民敏ヲ倉焼キテ」(太占ノ卜筮ノ作ヲ見ヨ)

ウラ 占上(事ノ心ノ意)事ノ成行ノ吉凶ヲ神ニ問ヒ奉リテ示ス

其ノ法ニ承ケテ定ムル法、ウラヘ。ウラナヒ。其法種々ナリ 太古ニ太占

アリ後ニ亀卜(亀甲ヲ焼キテ)ト筮ト(蓍ヲ)ト筮ト之ヲ全専ラ行ハレ

卜筮ナリ又古ヘニ足占石占ナドアリ其外灰占辻占ナドモアリ各條

ニ稱ス 敏明紀十四年六月「卜書」万土 タトニモ占ニモ先ヒル 今

官ダニ来マサズ 何時ト待タム」日本紀「告ラク君ガ名宇良ニ出テ

ウケ 祝部祭祝ノ卜事ニ出テム 神ノ御心ト事ヲ以テ」(トモ出ツル神

ノ御心モナシ」

ウラヤマさん　卜筮（占筮）ノ事ヲ解カタカリシタルコト（耕）或ハ占ノ筮ノ結

カ、手心たるさ二五（骨）あまにく、ゑにく（生肉）

（二）ウラナヒ、サンオキ、ハツケオキ。　牲者記、吾杭「うらるかさん、吉ノ御用、ニカモ

上手ナリ、うらやさん、うらやさん」「うらやさん　勝負ニ勝チテ何モカモ拾キタクリ

コム　興ヤ浮ブル　参詣ノ人ノ多ク門前ノ市ヲ成ス」　詠ヲ詠ス

（三）

（織田信長ノ）　桶狭間ノ戰ヒニ出ル前ニ敵ノ兵ノ多キヲ何ト思ヒ給フ

但三倍ノ兵ノ隱ル、ニ後ノ屋敷

織田ノ軍ノ勝ヲ得テ凱歌ヲ奏シタル者ハ、ウラナヒヤ。占屋さんト解シ

又ハ、賣卜者

うらやさん　天成　ものもうさんこと　紙三五

（末、うら、群むら）

うらまた（重）心歎（心歎きの裏、告訴訴のことだと（祝詞））

心ニ歎キ、トイキヲツキ、百一ハ、鶴ヲ鳥ト歎居シバ」同、十五「鶴

鳥ノ裏歎ヒシツ」（重用形ニ用ヰタル外ハ見エズ、（ノ如ク））

名河ニ田カヲ、万十七（ササ二）（鵠鳥ノ字良本集ニツイ心悪ニ思ヒ）

（本良ノ五ノ家ニ）

うらーはく（裏箔）生絹ノ切地ノ裏ノ銀箔ヲ宜キタルモノ。前面ヨリ消

ヲ塗カレテ隠然レテ光ヲ見ル

△内裏式、中、七月七日、相撲式「先出占手ノ占手勝則奏乱聲、最手勝則奏万歳」

うらーべたひ（浦手）浦より浦へ傳ヒ行ク

（新撰字鏡、最手占手）

源明抄ニ「遥ニ思ヒヤルカタ知ラザリシ浦ヨリ浦ヘタヒ行ク」

うらーて（占手）相撲ノ最手脇、今ノ国脇、また相撲ノ係ヲ

連歌「吹ヒ」

（三）最合ニ云フ意ニ番目ノ番ヒ、寛平歌合「左方占手歌」

うらーとふ（自）ウラトフ問ハ（ウラ）吉凶ヲ問フ

金六十萬ヲ以ト問フ」万十六。「ト部ヲモ八十ノ御モ占ヒ問ハ

君ニ逢ヒ見ム方便知ラズモ」

うらーながや（裏長屋）裏ノ長屋

「ウラトフ問ハ」夫ニ例アルハズ

ウラ人ノ田ト定ム　古ヘ定ム田神供ノ稲ヲ作ラムガ為ニ神代ノ下ノ

「ウラ人ノ田ト定ム」　上定田ニ　浦田稲醸天ノ甜酒

ウラ〻にはん　裏日本　おもてにはん（表）

ウラ〻ぞるルレ　自下ニ

オサヘガタ何ゴトモ　ウレシビト　ウラビト　ウラビ

（裏）　ウラ花　君ハ　快々

万土　山高ノ白雪ノ重ミ　浦経心

万土四十五　「浦醸而物ノ思ヒソ」　萬

懊悩　裏ヘ葉ル、思ヒ

万十五　君ニ恋ヒ葉ニ浦醸

万十九　君ニ恋ヒ裏醸居レバ　秋

ウラ深ミ　吾ガ恋ヒヤマズ

十三　浦の明方の　鶏

葉

ウラ〻ル　蛭ノ子足

千鳥

秋ノ夜ヲ左牡鹿鳴クナリ　浦の

立タザリシ　年ハ経ニリ山大木枝十七　象潟ヤ　蜑ノトボソノ明方ニ　ウラ〻

れテ千鳥鳴クナリ」此語音ヲ妙ニウラ〻れト用ヰル（ウラ〻れ、ウラ

（我カ）
びれ（但し連用形ニ見ルベシ）古今四秋上「秋ハ秋ウラビレ居レバ足引
ノ山下トヨミ鹿ノ鳴クラム」新葉十四恋四「色カハル小萩ガモトニウラビレ
テイツシカノ音ニ聞カムト知ラセム」（接尾語ビ（傍）ノ略ヲ見ヨ）

うらーみ　浦回（ウラ）（湾）前ノ項ト同ジ　えみし（夷）
浦ノメグリ、ウラベ、ウラワ、ウラ　ハ「由良ノ崎、タチニケラシ白神ノ磯ノ
浦箕ヲ敢ヘテ漕ギ動ム」

うらーわ　浦曲（ワ）（曲ノ條ヲ見ヨ）浦ノメグリ、ウラベ、
夫木十九恋「我白ノ浦ノ海人ハ（菊見ヶ浦ニ海ヤ又ムラム）」
「新恒集」秋下ニマカセテ瀬門ヲ渡ルカナ須磨ノウラワノ海人ノ舟舟」

うらみ-ぐま　怨熊（ム）怨ミ熊ナモモチ、赤浜集二「秋下ッスゴク吹クトキ
葛ノ葉ノウラみガほニ見エシドブ思フ」

10

77

うらーやす　心安（ヤスシ）心ガヤスキ、安心。万十四の「春ノ日ノ藤ノ末葉ノ
（ガ咲ク）
（屋）宇良夜須ニ。寝ル夜ノナキ児ノ（姉）ヲシ思ヘバ」畿内ノ大和国、
特ニ日本ヲモ御安国ト云フモ牛頭天王ノ安泰国（ヤスクニ）安国ト云フモ同ジ
神武紀三十年「目此国（大和国）ハ日本（ヤマト）者浦安国」（大祝詞「大
倭日高見国ヲ安国ト定メ奉リ」夫木抄の「波三ダテ屋治ヒシ君
ガ代ニ其名アラハスウラやすくに」（浦ノ意ニ解ス）
うらみつ-さ（ス）（かけツムラノ條ヲ見ヨ）互ニ怨ムコト。双方ノ不満足。怨（ラ
うらみッさ、ハトモ云フ「ハトモ云フ分ケテ」（うらみッさ、ノナイヤウニ分ケテ）
うらみッぽ-い　形一（うらみ深ほしノ約）怨ミ深レッぽ、おうッぽ（ナドモアリ）
怨ミ心多シ、ウラミガケナリ。

うらみつらみ（うらみの語源に因テ辛苦みと重複ネ云フナリ）

ゾメシキコト、辛苦キコト、「うらみつらみの言ヒ立テル」（古義三八）

うらのし　陰陽師　陰陽師（オンミヤウジ）　陰陽師（シヤウノ）磯氏

法華経（古義八四）

一万五〇〇〇

うらもやう　裏模様　婦人小袖、裏地ノ模様ニ使フ模様ヨツテ名ヲ

古ヘノうらかたぎヵ所謂廚鮨ル明和安永頃流行ヒ五つ合ヒ言フ

裏模様ヨリ筮饗録（明和）「京難波ノ遊女ノ婦人又ハ遊女体ノ者

ヤデ裏模様ヨリ称シテ泥絵ヲカキ絵ヨリ教ヘ東坡流ノ蘭竹ノ墨絵

ナド八流美尽ヒ」

ウラ・なし　形一「裏無」二心ニ裏表無シ、行心モナシ。

拙草ヨ。ヒノあ「悪レト人ニ言ヒシタル人、サルハ善シト知ラレタルヨリ、ウラ

あくゾ易エル」△(三)　隠ス　腹　後悔ナシ、腹黒ナル　後悔ス　悪ク「憂シト

テモ　サラニ思ヒヅカ(サレ又悪シ)ウルまくモノニゾアリケル」小大君集十五

「表ハカケ　裏ハ　裏ニ　裏ヲツケアリバカリアルトキ　まこと　方ナシ　浦裏無ク麻ネタル人ニ」

著聞集十六「月」　何

ウラ・ナキ　形一　裏無(二)心モナシ、方ナシ　「宇治長谷寺久、我ガ行ク

路ニ青柳、張リテ立テレバ物思ヒ出ツル」(三)心ニ裏表ナシ　方ナシ

「ウラナシ　撥ノ一重衣ノ(序)裏モ無クアルニム　児故　悪トツタルカモ」(支)

ウラ・やき　「裏行」　奥行ニ同ジ。

ウラルーアルタイ(名)　亜細亜洲中ノ烏拉山、亜爾泰山地方ニ亙ル

民族　言語ニ云フ語　昔ヤ蒙古人満洲人ツングウス人、韃靼人、土

耳古人其他ノ　物語トス言語学者ハ朝鮮語、日本語モ此中ニ入

ルト云フ

ウリ・ゆく　「売」　売ル　ベキ　ウリス　ウ

ウリかけきん　「売掛金」　売掛ニヨリ居ル代金

ウリ・きれる　ウルルルル　自下二　「売」切　売リ尽シテ終ル

ウリ・ノ・ぎり　「売」　「売屋」　売屋ニテ売ル業、醫師ノ診察投剤ニ当テ

ウリ・ノ・ひと　「売人」　所持ノ品ヲ売リ其金銭ニテ生活スル　他ニ牧人ニ通ナキニシテ　「売買」

ウリ〻さかす　他ロ　美倒　事無理ニ美ル、安リニ美ルヤリドバス。

ウリ〻さげる　ケルケルケケ　他下一　美下　官府ヨリ区間ニ競ル

ウリ〻さげる　他四　美浩　美ん三タメニ。タヤスク美ラズ。

ウリ〻そめ　美地　商品ヲ美リ始ムル、ウリダシ

ウリだか　美高　美リ上ケタル品ノ数又ハ金高

ウリだにゝし　低谷石　他ヨ国日高郡ノ低谷川　三度ハ石　川底ヨリ掘起シテ採ル自然ニ山岳ノ姿ヲナシ文房具ニ愛玩セラル、古屋谷石ニ同ジ

里ッこち青ふり

ウリだめしん　美溜金　商品ヲ美リテ取ル代金ノ積リ名ヲ入

ウリたち　七五　七一美ル（キ　ヒ　七）

ウリつけ　ケンセケ　他下一　美附　押附ケテ美リ込ム、

ウリ〻たつ　自四　砂低　（漢字砂低ノ文字後項参照）

少女始メテ男ニ逢フ。　備馬兵、山城ノ山城ノ　狛ノ　ノ　ウリノ低作ニ

（御ヨリ　シヌ　宇利多川　ヨリ　マデ）（少女ノ成長ヲ云フ）

拾遺ノ雑下ノ音ニ聞ク狛ノ　ウリノ低作トナリカクナリ、　偽心カナ　返シ　定

メナク　ヨマナル　ウリノつら　見テモ　たちヤ寄リ来ム　狛ノスキモノ（夢遊）（少女ヲ鷹）

メニ恋ヒ備馬兵ノ意ニ因ル）　（砂低）　（東ノ山城国狛村ニ産ル石ニテ　相生郡）

ウリ〻くり　「低作」低ヲ畠ニ植ユル者　備馬兵、山城ノ山城ノ狛ノ

宇利川久利　ウリノ　「宇利川久利」　宮井集「ウリ山ニ　狛野ノ栗ノ洗園生ノ栗ク

ナリユク夏ニモアルカナ」　拾芥抄ノ　「五月　内膳式　供御低　山城国

年中行事　祝儀

御園ノ防「禁也」

うりづけ 瓜漬 胡瓜・白瓜ナドノ塩漬

うりこ 瓜子 他ニ玉瓜 安房ニテ云フ。ウリカス。

うりばう 猪子 瓜坊ノ義、擬人名歟、猪ノ子尾圓ク円ク口吻尖リテ形白瓜ノ如シ 野猪ノ子、キノコ。今モ安房ニテ云フ。

うりふたつ 瓜三つ 瓜ヲ二ツ割ルヲ見バ双方ノ面象一様ナリ 親子兄弟ナドノ顔ノ酷似スルニ云フ。

うりはたす 他ニ瓜果 麦リテ終ニウリキル。

うりやう 雨量 雨雪ノ降リタル分量、其度ノ多少ヲ計リ知ル器 雨量計ト

うりをしみ 惜瓜 金ルヲ惜ミテ砂糖ニ漬リ詰ル。

拾遺集物名ニうるかアリ下号集ノ鮎鮨ハルカ

うるか 鱁鮨 潤臭 鮨ニモアル或ハ細臭ト縁ル歟

鮎ノ腸ノ塩辛。塩漬ニシテ三四日経キマゼテ成ル。腸ウルカ 渋ウルカナドトモ云ヒテ其渋味ヲ賞ス 又鮎ノ鰓ト鰭トヲ除キ腸ノ肉ト共ニ尾カシラ口ヲ塩漬ニシ少シ麹味噌ヲ加ヘ切込ウルカト云フ 又鮎ノ鰤ノミヲ塩漬ニシタルヲウルカト云フ。

潜真砂ト云フ草子ニ後水尾院御製「淀川ノ瀬ニ棲ム鮎ノ腸ニモウルカト云ハルハタアリケリ」 松屋筆記六十六

うるしぶぎやう 漆奉行 油奉行 漆奉行ヲ合併シタルナレバ油漆ト書キタリ 徳川幕府ノ職名、漆ト燈油ノ事ヲ司ル。勘定奉行ノ支配下ナリ

（ウラハ心愛シ、哀シ、ウラセシ　ウラハ心愛シ、哀シ、ウラセシ　ウラハ心愛シ、哀シ、ウラセシ　アリ）

キセノ心ヲ　クナリ

うるーせし　形一　敏捷（ウラセ）（心狭し）の轉カ　心愛し、哀し、ウラセシ　空穂、俊蔭上ナ「日本ハ帰リ来タリ玉ヒ

カシコシ、スルドシ、ウルハシ、心シコシ、

御門イトウルセカリシ者ノ帰リマシテ来ルコト悦ビ多ヒテ」

渡ノ若女ノ「宮ノ御琴ノ音ハ、ウルセクナリニケリ」宇治拾遺十、十七

「柱ガ、ウルハシク、心ハヘキニウルセカリケレバ、俊ナガラ、セノガエ、サウ聞エ、高クナリ

モテユケバ」

二九　産ンデモ、カヒナク、ウルセキ者ハ、カヒ車ヲ、ツクルナル」

うるしーゑん　漆絵　漆ノ性ヲナドミテ、俊成ヲ漆ニ書キ、キ

うるかす　他四　潤（ウルケル）ノ他動　ウルホス、浸シテヤカス　ふかす

うるしーばく　漆泊　塗リタル漆ノ上ニ金銀箔ヲ押シタル

（智證王十三年）

新羅　高句麗　史記ニ于山島ト　神代紀ニ上文ト　『萬葉集』中國之宇佐島、今在海北道中』

（推古三十年）

ウルマ　島　遠陵（朝鮮東南海上ノ欝陵島、欝陵ハ入聲、韓音ウツ、陵即チ島ノ義、うるしまト書ク）

（新羅ニ高句麗ニ于山島ト）

（うるま島人ト云フ意ノ説）

（當時其島ヲうるまトヨリ其人）

欽明紀ニ「ウルマ」ヲ聞キ知ラズ返答ナシトアリ

一條天皇寛弘年中朝鮮ノ欝陵島人ハ因幡國ニ漂着スト言フ

（比語ヲ成ス）

語通セサリシ因テ我ガ手ヲ知ラズ知ラズトヤルまの島人ト称ス

（○うるまさどは　條見合ハスベシ）

榕記寛弘元年「因幡國言、于陵島人十一口漂着」本朝麗藻下、

代語　陵島人「遠来殊俗、威望恩、彼不能言我代言」　沖津島

「事蹟書抜」中有「新羅國遠陵島人」　公任集「しらぎ（新羅）

ノうるまノ島人来テコノ人ノ言ヒ事ヲ聞知ラズト聞カセタマヒテ　欽明　遠言

聞エザリケル人ニ「オヤツカナラマノ島ノ人ナレヤ我カ恨ムルヲ知ラズ顔ナル」

千載集、一三[illegible]ノ句「我カ言ノ葉ヲ」トス　狭衣一ノ下、言ニ答ヘナキニ「コハイカニトヨ、ラマの点ノ人トモオボエハベルカナ」

ウルエス　名〔空ノ字ヲ三分シタル語（腸ヲ空シウモ意ト云フ）〕

離合逆字

賣菓ノ名、看板ニ片假名（「ウツボ」ヲ合シテ宗ト云ト離合ノ對、歌俳ヲ見ヨ）

蘭菓メカシテ附ニ見ヨリ

ミテ書ケリ　綿和ノ下削トス「免許蘭方疾、溜飲、積氣之薬、長崎保壽堂」

うるふ（名）閏（うるひトモ云フガ正シカルベシ但シうるふノ終止形ヲ名詞トスルハあまとふ（嬰孩）いとあふ、やまふの床ノ類モアリ閏字ノ訓ナリ）

欽明紀ニ「暦博士固徳王保孫、来朝ス、仍テ暦本ヲ授ケ、其ノ閏ヲ以テ、暦ノ法ニ無キ事ヲ以テ、更ニ他ノ月ニ入レシム」

閏音潤」ト仮撰、三、春、下「[illegible]」トアル[illegible]

「十二月」モアリ

増言用紙

うるふ　閏　陰暦ニ、一年ヲ三百六十日トシテゴレヲ十二箇月ニ分テドモ、月ノ朔望ノ運行ニ合ハズシテ、餘日ヲ生ズルヲ積ミテ一月トシテ、一年ニ加ルモノゴレヲ閏月トス、五年ニ二度ノ閏月アリ、十九年、七閏ニ及ビテ、餘分無シゴレヲ一章トオフトソ。（ほとよみノ條、見合ハスベシ）閏月アル年ヲ閏年トオフ。大陽暦ニテハ、一年ヲ三百六十五日トシ、四年毎ニ一日餘ルヲ積ミテ二月ニ加フ。

時

欽明紀十五年正月「去年閏月四日」古今、一、春、上「弥生にうるふ月ありケル」

閏ニザリケル人ニ「オボツカナクうるまノ島ノ人ナレヤ我ガ恨ムルヲ知ラズ顔ナル」

千載集、恋、一三〇ノ句「我ガ言ノ葉ヲ」トス　狭衣一ノ下、言フニ答ヘナキニ「コハイカニトヨうるまの志ま人トモオボエハベルカナ」

うるユス　名　（空ノ字ヲ三分シタル語、腸ヲ空シうる意ト云フ）

離合迷字

賣薬名、看板ニ片假名（「ウルホ」ヲ合セテ宗トセル離合ノ歌、歌俳ヲ見ヨ）

蘭学ノカシラニ附ケル者ニテ書ケリ

緩和ノ下剤トス「免許蘭方疾、溜飲、積聚之薬、長崎保壽堂」

うるふ（名）閏（うるひと云フガ正シカルベシ但シうるふノ終止形ヲ名詞トスルハあまとゝみ（嬰孩）いとゝあふ、やまふノ床ノ類モアリ閏字ハ欽明紀ニ「暦始メテ傳来」説文ニ「閏餘分之月也」トアリテ餘ノ義ナリうるふ、うるふ、諸ハ敏達紀特続紀等ニ「潤月」ト記サル集韻ニ「閏、音潤」ト見エ（今）音潤ノ字ヲ此閏ノ字ヲ文字漢ニセシヨリ起ルナルベシ後撰、三、春下弥生ニうるふ日ヤル年云ヒ「あまり丈アリテ行ク年ダニモ」トヤル歌アリ閏ノ字ノ正訓ハ「ちのつき」保元ノ年ニ追記ニアルド「閏十月」トモ「ちのつき保ヲ見ヨ」

カード

欽明紀十五年正月「去年閏月四日」古今、一春、上「弥生ニうるふ月アリケル

年」名義抄ノ閨、ウルフ、字類抄ノ潤月、ウルフ、「潤月ウルフ」

うるはしむ　他四　親愛　親シル愛シル思フ。ウツクシム、愛ス

古事記中（意祉）ヒメノ　古波陀少女ハ云ニ宇流波志美思フ」名詞ニ用ヒテ。万十八、十八諸僚飲宴ノ歌「サヒバ、後ヲ會ムト思ヘコリ今ノ眼前ヲ宇流波之美志」

うるむ　自四　潤（前條ノ項ト同意ナルカ）

撃ラレテ肌ニ青黒ク色ヅク。倭名抄、三十五「疾、以牧撃人其皮膚起青黒也、宇流無」爲忠百首、下「形見ニトうるむバカリモ抓ミシカナ人ニスミレノ花ト知ル知ル」

△八十五「嬋娟美麗之貌宇留和志トアルハ誤」

うるはし　形シ　親愛（心愛シ親ヲ轉ヲ思ハル心靈異ノ上ニ）

（一）愛シ、愛ヅベシ、愛スベシ、ウラグハシ、イトホシ、ウツクシ、

古事記中（景行）五十五「青垣山ゴモル大和シ宇流波斯」

神代紀上十「我愛之妹」万二十六「宇流波之ト吾ガ思フ君ヲ」

（三）父リ睦ビ。ナカヨシ、友善　神代紀、下ニ「友善」私記「宇留波之」

雜中紀ノ「素盞嗚好皇子」常陸國風土記、行方郡「欲其愍恵」

恵慈、所以此野謂ニ宇流波之ノ野」伊勢ノ「昔、男、イトうるはしき友アリケリ」

△八十五「嬋娟美麗之貌宇留和志トアルハ誤」

うるはし　形シ　美麗（前件ノ語ノ後ノ類、美麗ナルハ愛スベキ意ニ移リ名ナリ）

（二）美シ、美麗ナリ　結麗ナリ　宜命

結ビ共ニ美麗ナリ　（説、東南ノ角ニ當リテ基部ノ異ニ）

（麗、雲ニ色相交リテ立ツ雲ナリ）

万葉集　雲異ニ上ル　「妹ナルハシ」　名義抄　八部「美ナルハシ」

同　雜部「艶ナルハシ」

（三）正シ、キラキラシ、端正　源氏ノ手習ノ「伊ノ字ハ心ニテ誕キオキ

タマヘル御法ニ」　空穂　國譲　中「穴ヤ来メタマヘド、イトイミジク　うるはし

く作リタルバ障ヒナシ」

いわ

うろくず（名）細魚　十巻ノ書、汀ニ添ヒテ游ブ　銭ケル状ニテ多スク

（添ヒ寄ル意）

抽元、ウロクズ　（魚）いわし　（例）

小魚ノ名、越前ノ足羽川ニ多シ、一名、ウロクズ　蝦虎魚ニ似テ寸許

魚アリ　是レカト云フ（『野菜博物新編』）（義注倭名抄八十二）　鰯魚一種

倭名抄十九四「細魚、字留里古」

いわし　鰯　（名）　（説、いさざ、うろくず、どちよッさ）

鰯ニ同ジ　東京　魚商ノ語、「殺ノ許ニ来タリテ洗ヒオコタリテ洗師ニ

うれしき　賣先ニ来ルヲ方、ウレシキ。　堀川百首、「世ノ常ノ人ヒトリ屋ニ

置ク蛭ノ細ウロクズ夏ノ夕ベ」

煩惱

うるさし　形二煩（うるせし）轉（ニテン）敏捷キ過ギル■ハ煩（ワズラハ）ヒク九きり（意）

移リタルナルベシ、五月蠅（ふせぐ、ふさぐ）ナキ者ハさばへ（俗語）

（二）ワヅラハシ、ナヤマシ、メンダウナリ。伊勢ノ物語「ムサブミ、サスガニカケテ思ヒ

ワヅラハ問ヒモツラシ河ヲモうるさしし」源ノ若紫九「尼君髪ヲ搔キ

ナデツ、撫ルコトヲモうるさがりタマヘド」

三　厭シ、嫌シ、邪嫌（キラヒ）厭（イトハ）後撰十八雜四「常ニ来トテうるさがり

テ隱レケレバ大和ノ（ニテアリ）親ノ許ニ衣ヲ洗ヒニオコセタリ云ヒ法師ニ

ナリタル人ハカクうるさき事ヲ云ヒモノカ」堤中百首「柴ノ家ハヒリノ庭ニ

置ク蚊火（カビ）ノ烟うるさき夏ノ夕暮」

うるし一匁 漆五 漆塗ノ五、塗五、白木五 對ス

兵部式「凡武官人等皆用漆弓」兵庫式、弦作大幸金雑

物、梓弓五、漆三、漆三遍、毎遍乾二日」

うるし五 漆油 黒摺ノ僧ノ上ニ膠ヲ引キテ光澤ヲ出サシメ其上

ニ金泥ナド用ヰ油ヲカキ光ノ良保ノ頃江戸ニ行シ畫工奥村

政信ナド書キ出ス（浮世絵ヲ発）

△同趣ノ語ハヲ添ヘテ確ニ名詞トナリ末ニ掲ク見ヨ

名義抄 日部「曰イハク」△

いはく（名）曰（言ふの延テ云フ一ツノ語格ニ云ふ同趣ノ語皆然リ）

（二）言フコト。言フヤウ。△此語ノ用法ハ竹取物語ニ「かぐや姫（翁ニ）い

はく云ニ老イ衰ヘタマヘル状ヲ見奉ラザラムコソ悲シカラメト、ひて泣

く」トアルガ如ク下ニ用ヰ又いふト結ブヨリ通則トス言ひけりヨリいひけ

らくト云フモ。いひけるとゝいひけるやうニ古ヘテ十九親王ノい

ひけらく狩ニテ天ノ上ニ乗ルトゝ「詠ミテ盃ハサセト」ひければ」△

其證ハ竹取物語ニ「翁、皇子ニ申スやう云ニ、メデタキ物ニモ

（侍ルカナ）ト申スと」源ノ玉葛ノ「此男ドモヲ呼取リテ」カタラフやうと云ニ

ナドカタラフニトアルコレノ外又さとト語全ク同じ。ゆ、かりヲ尋ネかくト云フモ大鏡ノ「後條ノ」上ノ「上ノ」からくハ次第ノマニ一人皇子ヨナム春宮トモ

（トアル同ジ）

（けれど）（下ニ同ジ意ヲ書キ文ハ異セルナリ）其外、語ニ、かたらく、恐ら
く、恨ミ、ヲ、宣ふ、のだまく、謀ヲ、ねがはく、老ゆ、おもふく、恋ふ
ろ、さ、ふらく、言ヘリ、いふらく、言ふ、ふ、言ふ、いふ、疑ヘリ、ただ、ふ（へ）らく、言ふ、ふ、いふ
あらくず皆同ジ

（三）イハレ。ワケ。仔細 事由「ソレニハ」はくガアル」

万十九 四十四 新春楽ノ歌「天地ト相榮エムト大宮ヲ仕ヘ（造リ）マツレバ貴ク宇礼之伎 結句三十一 有礼志 喜シトナム見ル」

土佐 二月五日 「船ヲ漕ぎ行カスナリ」 うれしと思ヒタルベキモノ

孝リタルベ 心 快ク喜バシ 愉快 宇野抄「嬉、歓、娯、悦シ」

嬉（タノシビ）ヲ記ス、住吉ノ神ニ「欲シキ物ノオハスラム」トテ幣奉レ

うれし 形二 愛シノラウレシト約マリテ又ウレシト轉ジタル語カ（賓客、まら

うど、何ゾ也）「ウレあふ、うらあふ、これふ（愁）」

「宣雅の春下「真菅生ム荒田ニ水ヲマカセバうれしがほニ鳴ク蛙カナ」

うれたし 形一 「憤懣（心痛シ）」 幻轉カ（何ゾ、ソレ）恨むト同意

慣ク恨シ 古事記上三十九 「鶏ノ鳴ク宇礼多久モ鳴クナル鳥カ」

ツラニクシ、イマイマシ

神武紀の「憤懣大丈夫 敵傷ノ備ヲ将不郭而死耶」 註「憤懣 止云子梨多葉伊夜」 舒明紀「憤懣為蝦夷将見殺」

万八十 「宇礼多伎ヤ酒霍公鳥 暁ノウチカラキニ追ヘド追ヘド尚ホ来鳴キテ」 神楽歌ノ前張香「はしハ四十二 妬サニたヤおの屋生ニマカリ木ノ根ヲ掘リ食ムガ」 形容 接尾語

うれはし 形二 「憂」 「憂」 「苦はし」 「迫はし」 「かゞはし」

憂フベシ、ナゲカハシ、十巻ノ「詩」 「足引ノ山田ノホツ巳シヤ我ヲ欲シト云フ」 うれはしきコト 名義抄「吁、ウレハシ、ナゲク」の雅訓「憂、ウレハシ」

海の明石「コヽヲ過ルキサヾくうれはし」

万十九 四十四 新音楽ノ歌「天地ト相榮エムト大宮ヲ仕ヘ(造リ)マツレバ貴ク宇礼之伎」 縫紀三十一 有礼志喜シトナモ見ル」

土佐 二月五日 「ヌサ」ニ心ノイカネバ 沖ヘ行カスナリナホ うれしト思ヒタビキモノ

孝リタビ(ヒ)心 快ク喜バシ 愉快 宇野抄「嬉、歓、娯、ヒシ」

(三) 嬉(タノシビ)ノ字ヲ記ス、住吉ノ神ニ「欲シキ物ノオハスラムトテ帯奉レ」(又風止マズ)

カタジケナシ。アリガタシ 威伝(大和ニ「院ノ御消息」イトうれしく侍リテカク色許サ」ハベルコトナド聞コエタマフ)

うれしがま 嬉顔 うレシキオモモチ。コヨサウナル顔。

(笠雅の春下「真菅生ム荒田ニ水ヲマカセレバうれしがほニ鳴く蛙カナ」)

うれたし 形一「愁歎(心痛シ)」 幻轉カ(何ゾ)「恨むト言フ」

慟ク恨シ 古事記上三十九「鶏ノ鳴ク宇礼多久モ鳴クナル鳥カ」

(ツニニクシ、イマイマシ)

神武紀の「愁歎大丈夫 敵傷ガ胸 将不郭而死耶」 註「愁歎 此云于梨多夫葉伽夜」

万八十「宇礼多伎ヤ醜霍公鳥 暁ノウツカシキニ追ヘド尚シ来鳴キテ」 神楽歌「前張 春 はレハ四月 形定 接尾語」

うれーはし 形二「憂(憂ヘ)」 「はし」

憂フベシ、ナゲカハシ。十八ノ。 「足引ノ山田ノホツ巳シヤ我ヲ欲シト言フ」 うれはしきコト 名義抄「吁、ウレハシ、ナゲク」の雑部「憂、ウレハシ」

海の明 「コヽヲ進ルキサヘ」 「うれはし」

うれ（名）（一）愁ヘテ訴フルコト。愁訴

竹取「カノうれ（セレ工匠等オバカシヤ姫ヤ）」

宇治拾遺七「うれ成リヨリ悦

（二）カナシミ、ナゲキ。愁

心配。憂

（三）喪、オモヒ。服忌。天武紀下の「重服」

（五）人ノ憂ヘトナンヂキコト、ワザハヒ。患「國ノうれ」「火災ノうれ」「麻疹ノうれ」

漢籍逢

「丁憂」

10 根岸 去むらや製

（共ニ親ク去リ）

うりばたけ（瓜畠）（瓜ヲ植ユツクル畠。

うれづく（名）「宇礼豆玖」

△（うれ、愁然ノうれ、づく、ノ結ぐ）

（古事記傳三十四）類例ノ事ヒツヒシ條ヲ見ヨ。結ぐ終止形ノ名詞トナルハ調ノ船ノ例アリ。頁クレバ慨憤ミテ償フ意ナリト云ヘリ

古事記中（夏沙）ハナミ少女アリ。又兄弟二人アリ。兄、少女ヲ得ムトスレ

じゝ得ズ。弟ハタヤスク得ムト云フ。兄曰ク汝、少女ヲ得タラバ酒

山河ノ物ヲ償ヘテ宇礼豆玖ノ物ヲ償ハズトアリ。賠償ノ意

兄ハ宇礼豆玖ノ物ヲ償ハズトアリ。賠償ノ意ナリ。

賠償ノ意ナリ

賠償ノ意ナリ

賠償ノ意ナリ

うれ（名）（一）愁ヘフルコト。愁訴

竹取「カノうれ（セレ工匠等オバカラヤ姫ヲ「スエテ」「ウレキ人ヨキヨリ云ヒテ身」「禄イト多ク取ラセタリ」

「宇治拾遺」七「うれ人ヒトリアリ」

（三）カナシミ、ナゲキ。愁「うれ（ヒ沈ム）」（四）心ヲ傷ムル、アンジル。

心配。憂

（三）喪、オモヒ。服忌。天武位下の「重服」（十五）

万葉「ナガキ年ニ思ヒ積ミ来ル憂ヒ止ミヌ」

（五）人ノ憂ヘトナンギコト、ワザハヒ、難「國ノうれ」「次第ノうれ」「麻疹ノうれ」

漢籍「丁憂」

10 根岸 表むらや製 共親ノ喪ヲ

うりばたけ 瓜畑 瓜ヲ植エツクル畠。

うれづく（名）「宇礼豆玖」

連歌「清濁取合」

ウレヒ（愁）ヲ（感）ヲ（愁）ヲ（詩）

ウレヒ（愁）ヲ（感）ヲ（詩）

里ヒ設テ供給ル意ノ語ナレバ調ノ私ノ例リ

古事記中（遠沙）ハ十ニ少女アリ又兄弟二人アリ兄、少女ヲ得ムトス

じゑ得ズハ弟ハタヤスク得ムト云フ兄曰ハク汝、少女ヲ得タラバ酒

山河ノ物ヲ備ヘテ宇礼豆玖ヲ玖ラセムト云フ弟、少女ヲ得タレドモ

兄ハ宇礼豆玖ノ物ヲ償ハズトアリ賠償ノ意

賠償ノ意ヲ賠償ノ語キヤリ

賠償ノ語キヤリ

慷慨ミ

うるふ 閏（旦うるふ）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うるふ 閏（又うるふ）

後撰 三五下「弥生ニうるふ月ハ自ら
あまりなれハ」

飯明紀 寛定月 閏月

「閏」

「閏月」

「閏月」

「閏月

(三)悲ム。歎ク。愁 神代紀、上の「夫妻共愁」（名義抄「愁、ウレフ」）

最勝王經音義「慼、宇礼不」（源の定輝「ナホ、エ堪ヘマジクナムラホ」）

(三)心モトナク思フ。心配ス、アジル。憂 神代紀上十三「諸神憂之」

神代紀下十三「幼復憂」 私記「末太奈宇礼倍末之奈」

字鏡 七十一 沈心憂也、宇礼不 一万五十三「妻子トモハ足ヒ方ニ置キ居テ憂ヘテ」

憂 ウレフ。ウレヘフ。ウレヘフ。ウレヘ

うれあき「喜ク」ウレシイ、サバケ。

うるかしこし　自下一「賣」（うる）（得意）ノ約轉シテ自動詞トナル

キノ取柄、値段ヲ書キ「ヲシル」

賣ルヨリサバケル。ウレシイ。

「雨露」（二）あめトつゆト（三）イツクシミ。メグミ。「雨露ノ恩」

「島蔭」　島キト白キト、碁ヲ打ツコト。「一ヨ蔭カラ」

「迂路」　ウロウロ

ウロウロ・ウロ（名）（ウロツキマハル意）

傳泊セル船々ノ間　（食物ヲ載セテ）

「殊西國ノ船」　時船々ノ間ヲ定メテ漕ギメグリテ賣リ歩ク小舟

土産潮詰（貢文）「雲上厳島新川三ツ目ノ橋ノうろうろ茶船」

ウロウロまるさ（名）　ウロツキタル目ツキ

ウロウロし「鰯石」三角ノ形ニ作リタル石、敷石ナドニ用ヰル

ウロウロ・ムし「鰯雲」　ミヅマサグモ、鱗雲、夏秋ノ夕、綿ノ如キ白雲ノ異稱

「ヰナセテ空ニタヒヒモノ、雨北トス」「雲出ツレバ鰯ノ漁多シトナ」　鰯雲ニモ

うゑぬく（植）　あらぬくノ轉　其條ヲ見ヨ

うゑ

うゑうつり　外郎賣　歌舞妓六番ノ内　二世市川團十郎　相模小田原ノ住人　定屋ノ外郎薬ノ行商ニ拾レテ功成リ名遂ゲ根白ヲ快離ニ述ベ演ズルモノ　見ヨモツカズ

うゑかへ　植換　樹ヲ移シテ植ヱミヅルヿ　移植

うゑきし　植木師　植木ヲ培養スル業トスル者　種樹家　園丁

うゑじぶ　右世平府　カ情士府ヲ見ヨ

うゑた　植田　早苗植ヱル田　田植　長元三年大納言藤原実資「程モナク茂キ　うゑ田ノ早苗カナ　草葉ノ取リモヤヘヌマデ」

うゑつき　植月（ウヱツキ）　昔ヲ植月ノ義ナリ　稲種ヲ植ヱテ早苗ノ生ヒ出ヅル月、天木七「今見ばうゑ月近き我門ノ早稲田ノ苗ミギハ生ヒニケリ」

うゑ（飢）　植ヱ又ハ飢ウヱヲ見ヨ

うゑめ　植女（ウヱメ）　田植ヱル女、早少女（サヲトメ）　俱妻女集「学ヲ」

夫木七、早苗「ホトトギス聲ニうゑメノハヤサレテ山田ノ早苗ヱマデノ取」

（三）專ラ摂津ノ住吉神社ノ祭ニ和泉ノ堺ノ乙女（オトメ）ノ神ノ南田ニ田植ヱルヲアリ　住吉女集「ツマヲサメタル植女ノ雅ヲツひぢニオリクルカアラム」夫木七の「早苗取ル御田ノ植ヱ女モ色マノ袖ヲツラネテ祝ヲ今日カナ」

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うを〻せんべい「魚煎餅」魚肉ヲ煎餅ノ如ク作リ乾モノ　鯖海老等肉ヲ葛粉ニテ包ミ能クロキテ待ク展ベ焼炉ニテ乾カス

うを〻つけ「魚附」海辺ナドニ植エツケタル黒松ナド林点影海水ニ落チテ水中暗ク魚ナヲ寄附カニ　又森林中ニ棲ム虫ナ微生物ヲ海中ニ送リ魚ノ餌トモナリ

うを〻ぶか「魚心」有ル人ニ好意アレバ已レモ好意ヲ生ズルヲ魚心ト水心ト云ヒ水ノ魚ニ文リトモ云フ　三國志ノ「玄徳與亮情好日密」曰孤之有ニ孔明一猶ニ魚之有ニ水一」（蜀ノ主帝劉備字玄徳諸葛亮字孔明）　詩経ノ「浩々者水、有々者魚、未直有室家」安ク我居」註「水魚喩人所偏愛」

天智紀ノ「樹ハ己ガ実多実多成レ」ト云ヘ

本紙ヲ上綱ニ上リ

うを〻みち「魚見」海辺ノ高キ所ニ居テ海中ニ魚集ルヲ見届ケル

「漁夫ニ出漁ノ方向ヲ告ゲ知ラセ」

えーだ「枝」（本言ハ枝ヨリ枝出ル）枝ノ義、又えだ上ニハ枝手ノ顕ル（栃ヲ手トモ云フ）うたて、うたた（轉）相ノ枝ズ敗ル次條ヲ見ヨ

（二）本言、え。草木ノ茎幹ヨリ合シテ生ズルモノ

古事記下（雄略）「樹ガ近ハ本近ハ天ヲ覆ヒ」貫平歌合「何ノ花ヲカ花トハ折ル」松ガ枝」梅ガ枝」雄略紀ノ「榛ガ宮」「榛ガ宮」後名抄二十三「枝條、衣太」（三）物事ニスベテ本ヨリ分レ出ヅルモノ　支

名義抄「茨、エダ、ヤカラ」同文部「支エダ」枝路」枝川」（三）長持ヲ数ル語平家ノ三日平氏「長持二十えだニ黄金巻物清物アイ物ヲ入テ奉キラル」

えだ 肢（前條ノ注釈ヲ見ヨ）

本言、元。身体ヨリ出デタル手足。

雄略紀ノ「張夫婦四支（エダ）於味」（後名抄三四）身体孔「肢、衣太、」

えだ

元 疫（疫ノ音ニアラズ）人ニ病ガ役ニ立セテ立ツ。似タ故ノ名カト云フ（役也）

（和漢略合注 つつ「疫民皆病」釋名「疫役也言有鬼行役也」）

エヤミ。疫病 岩神紀ノ「国内多ク疾疫（ヤミ）」 古事記 中（仁徳）サ「エ役ら

病多起、人民死者盡」 大鏡、中、「時ノえこオジヤサス」

（孝文見ル）

元 榎 えのき、條ヲ見ヨ

あぶら、元 油荏 荏（エ）條ヲ見ヨ

えぞ、ち 蝦夷地 明治以前、北海道、千島、樺太ヲ稱シタル名語

~~えだ、えだ 枝~~

えだ、おとり 枝 枝（條ノ（ノ）ヲ見ヨ）

えだ、さんごじゅ 枝珊瑚 珊瑚、樹ノ枝美シク壮ニシテ

えだ、じろ 枝城 出城ニ同ジ

（大子漢寶記五、秋「山腰ノ枝珊瑚枝ガ濃イ紅葉」）

~~えだ、ぞり 枝座 えだざしニ同ジ~~

~~えだ、まめ 枝豆 大豆ノ莢ヲ枝ニ付ケタモノ、如ニ食フニツキテ云フ、ユデマメ、~~

えだ、みち 枝道 本路ヨリ分レ出ル路 岐路

えだい（身）（身体ノ略、為體ノ字音ニ通ズ、スガタ、本性、

（元ト、條ヲ見ヨ）

~~「サイタイ」（身体）~~

（身体）

えたつツテタチ。自ハ役（エダ）（役ハ係ヲ見ヨ）役（エダ）ニ差セテ立チオモムク、夫役（ブヤク）ニ充テラレテ

書紀、大化元年育「新羅奏請年来民乏使而役之」是以建内宿禰引率蕃役之（エダタセテ）而作百濟池（ヒツミ）」

万十四廿二「大君ノ命カシコミ愛し妹ガ手枕離レ（ハナレ）太気（オホケ）来ヌカモ」（えたち（東詞））

えたちハ役（エダ）ニ（ハ）前傳（詳作事）

仲哀記、九年育「由新羅役（エダテテ）以不得幣天皇也」特統紀、のの「壬申（ミヅノエサル）之役（エダ）」

古事記、下（二重）ニ「役（エダテテ）秦人作茨田堤」

えたち役（エダ）（二）エダツ。役（ヤク）。夫役（ブヤク）。宗神紀十二年九月「始校人民」

更科（サラシナ）調役（ヤク）（三）人民ヲ駆ニ役立ツル。イヤダテ。タヽカヒ、戦争。

仁徳紀十年十月「掘宮北之郊原（ヲカ）引水以入海」新羅人朝貢則

勞（ネギラフ）新羅役（エダテテ）